

# 第1章 岩国市の歴史的風致形成の背景

## 1. 自然的環境

### (1)位置

本市は、本州の西端である山口県の東部に位置し、東は広島県、北は島根県と接します。

北は島根県益田市・鹿足郡吉賀町、東は山口県玖珂郡和木町、広島県大竹市・廿日市市、南は山口県柳井市・光市・熊毛郡田布施町、西は山口県周南市とそれぞれ接しています。

市域は、北部は中国山地の山々から、南東部は瀬戸内海の島嶼部まで、東西51.2km、南北54.5km、総面積873.72km<sup>2</sup>は県下第2位の広さです。

山口県の県庁所在地である山口市までは約85km、広島県の県庁所在地である広島市まで約35kmの距離があります。



図1-1 山口県の位置

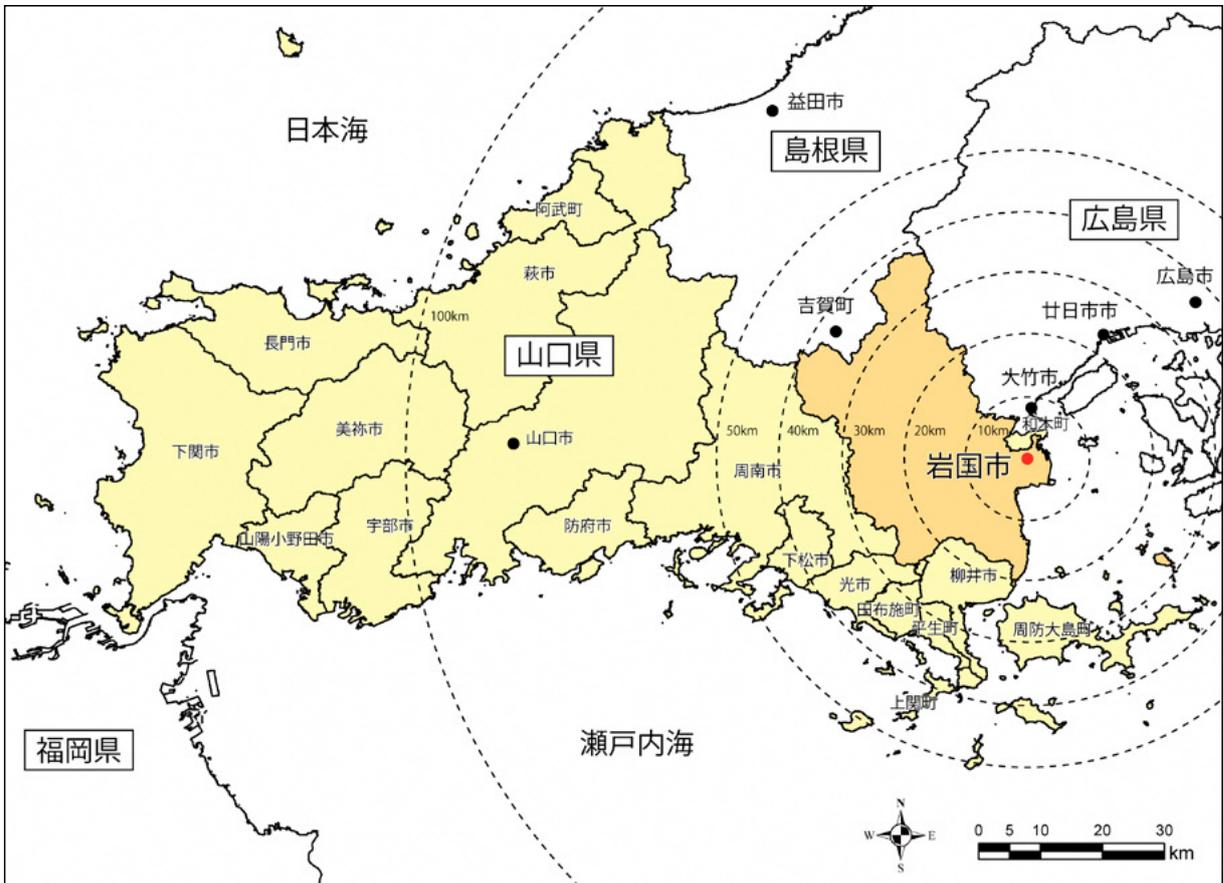


図1-2 岩国市の位置

## (2) 地形・地質・水系

### 1) 地形

本市は、市域の大部分が山地・丘陵で構成されています。主な山地・丘陵としては、寂地山（標高1,337m）を代表とした1,000m級の山々がある中国山地、物見ヶ岳（標高693m）がある周防山地、蓮華山（標高576m）がある周防丘陵、高照寺山（標高645m）がある周南丘陵が挙げられます。市内に平地は少なく、主な平地としては、錦川河口域の開作地と島田川沿いに広がる玖西盆地、由宇川河口部に見られます。

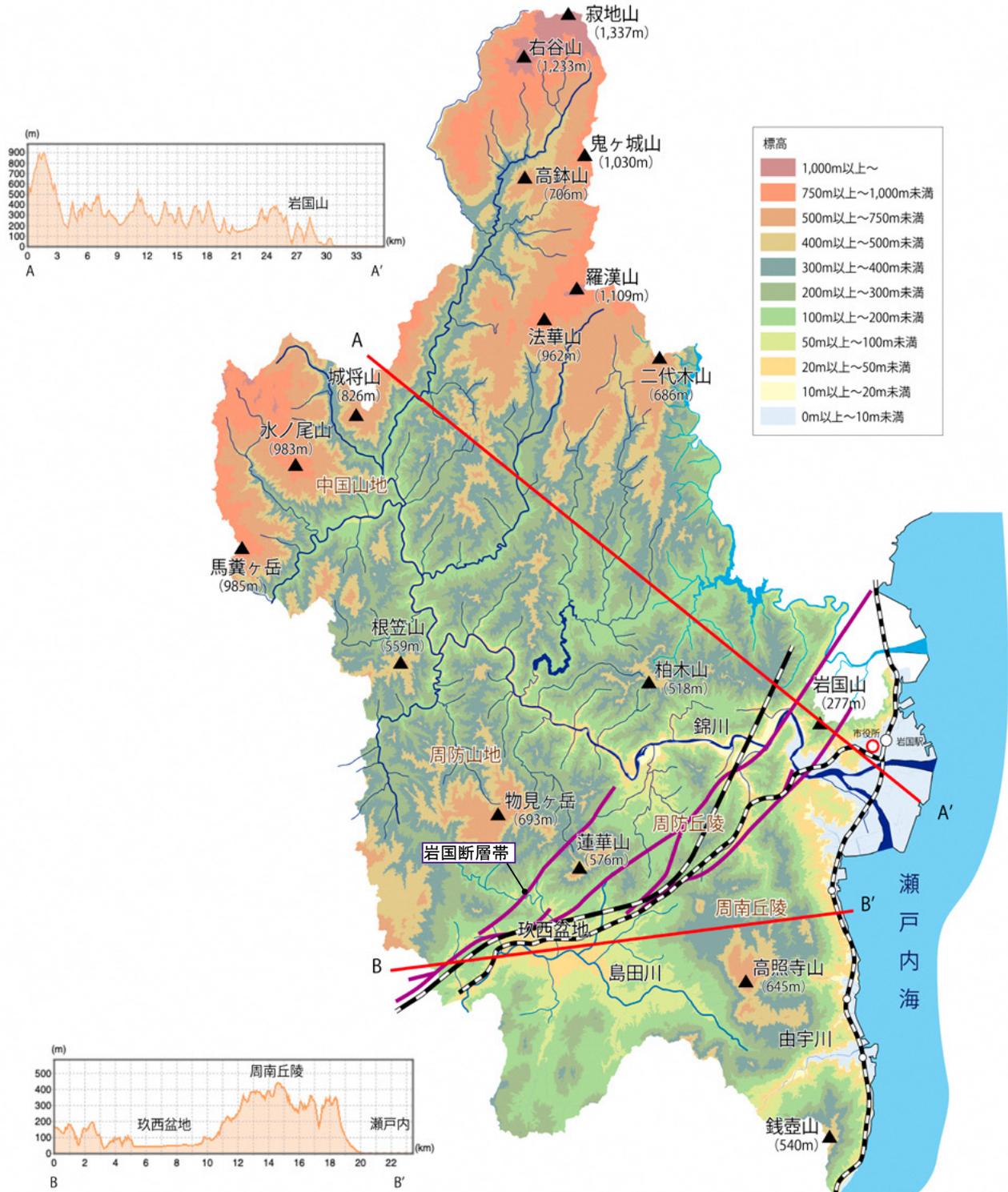


図1-3 地形

## 2) 地質

本市の地質を見ていくと、錦川流域の大部分は、美川層群、錦層群、玖珂層群等の泥質片岩や混在岩が占めています。一方で、錦町の最北部や岩国市街地の背後の山、玖西盆地周辺の山地は広島花崗岩類の地質が広がっています。

瀬戸内海に面する現在の市街地は埋立地として、近世期に開作で河口域に整備された土地であることがわかります。

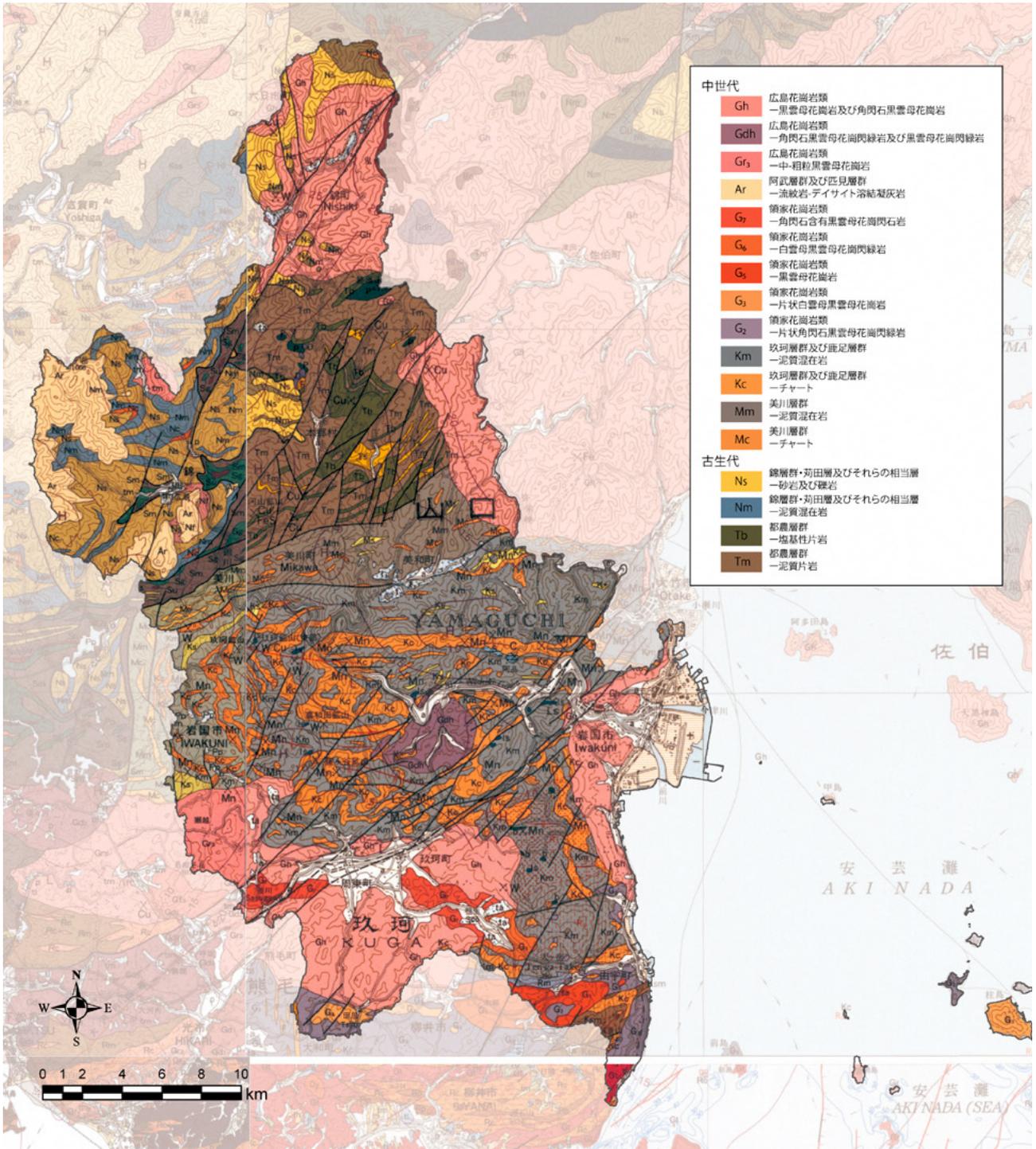


図1-4 地質 (20万分の1地質図幅「広島」「山口及び三島」「松山」(産総研地質調査総合センター) を加工して作成)

### 3) 水系

市内の水系は、主に錦川水系、島田川水系、小瀬川水系に分けられます。中でも錦川水系が市域の大部分を占めています。

錦川水系は、山口県と島根県の県境に位置する<sup>あざみ が だけ</sup>筋ヶ岳（標高1,004m）に源を発し、<sup>みなもと ほつ</sup>南流しながら西に隣接する周南市より北流し、宇佐川と合流して南東に向きを変え、蛇行を繰り返しながら瀬戸内海へと流れ込みます。支流から本流への距離が短いことから、流域内での強い雨で急速に洪水流量に達しやすく、河道はV字谷で水位の上下が大きく、下流では縦断勾配が顕著に緩くなるため土砂の堆積が集中しやすいことが錦川の特徴といえます。洪水が発生しやすい下流域に位置する城下町では、石積や築堤などの治水整備の跡が残されています。

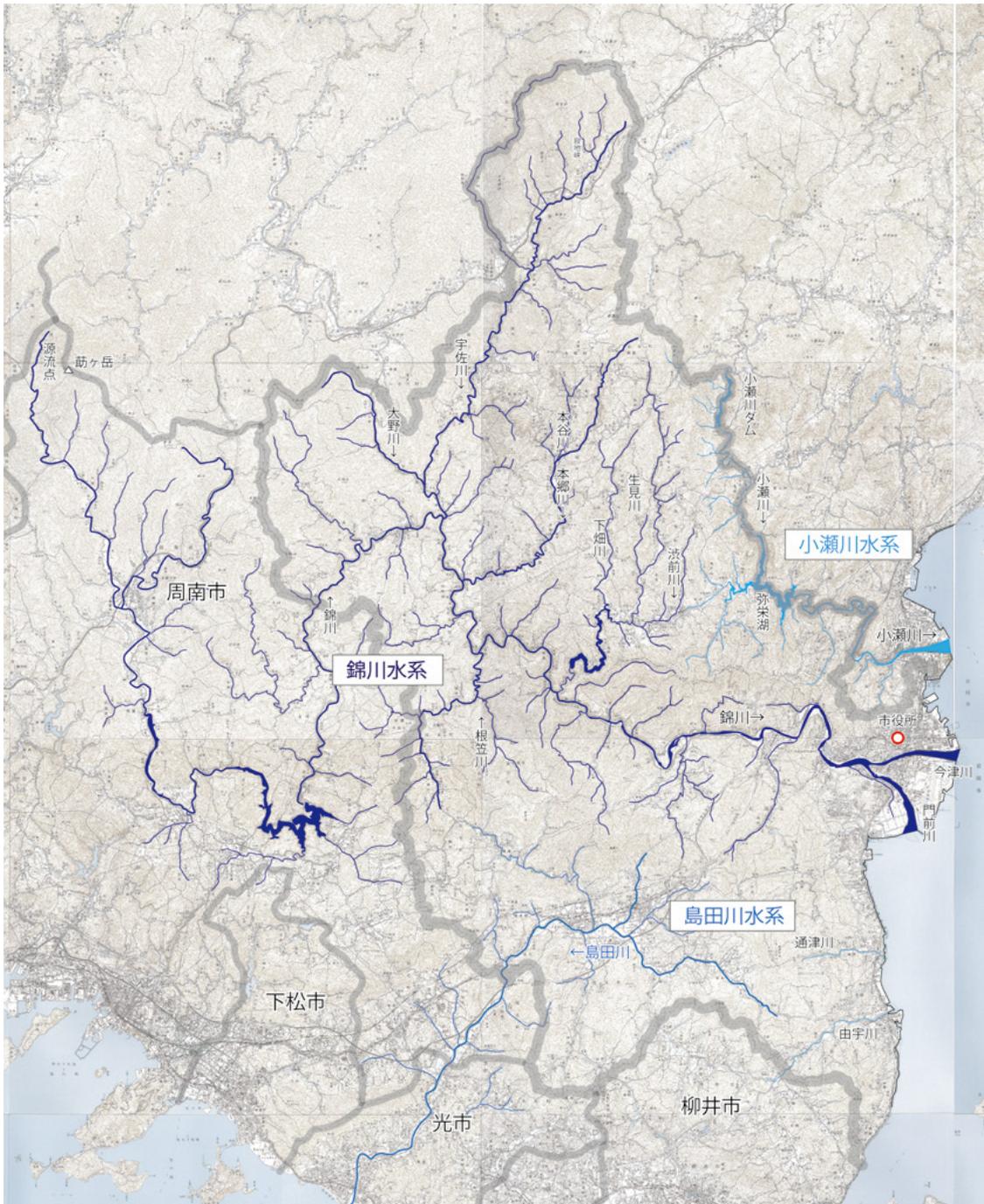


図1-5 水系

### (3) 気象

市内の気候を気象庁のデータから見ていくと、南部(岩国観測所)は年間を通じて温暖で降水量が少なく、概ね瀬戸内特有の気象特性を有しています。一方で、北部(広瀬観測所)は標高の高い山間地であり、南部に比べると降水量も多く、冬場には南部と2℃ちかくの気温差を生じます。

年間降水量は、管内3観測所ごとに、岩国では1,876mm、玖珂では1,983.3mm、広瀬では2,311.7mmで、いずれの地点でも7月、9月の降水量が多いです。(平成30年(2018)～令和4年(2022)の平均値)

年平均気温は、岩国では15.8℃、玖珂では15.3℃、広瀬では14.7℃と広瀬がやや低いです。(平成30年(2018)～令和4年(2022)の平均値)

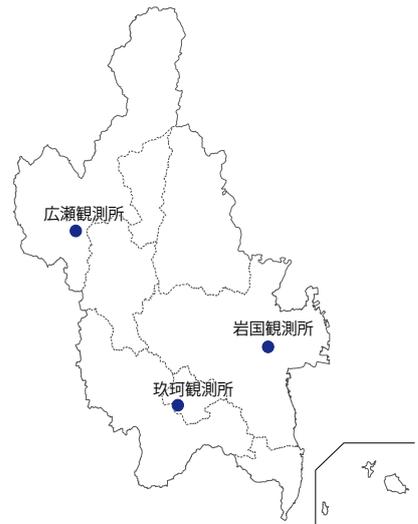


図1-6 各観測所位置図

表1-1 年平均気温と年間降水量(資料 気象庁 過去の気象データ)  
※平成30年(2018)～令和4年(2022)の数値の平均値)

平均降水量 (mm)													
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間降水量
岩国	58.1	65.3	175.3	152.7	166.8	234.7	371.1	205.9	276.7	53.9	49.7	65.8	1,876.0
玖珂	58.5	69.1	189.6	163.3	200.7	242	402.3	233.3	248.7	50.7	56	69.1	1,983.3
広瀬	78.6	91.1	233	184.7	200.9	289.2	447.6	275.9	306.8	68.2	52.4	83.3	2,311.7

日平均気温 (℃)													
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均気温
岩国	4.8	5.6	10.0	14.0	18.7	22.4	26.1	27.6	23.9	17.9	12.3	6.7	15.8
玖珂	3.8	4.8	9.7	13.6	18.4	22.2	25.8	27.2	23.7	17.4	11.5	5.6	15.3
広瀬	3.1	4.2	9.2	13.1	17.9	21.8	25.4	26.6	22.8	16.5	10.6	4.9	14.7

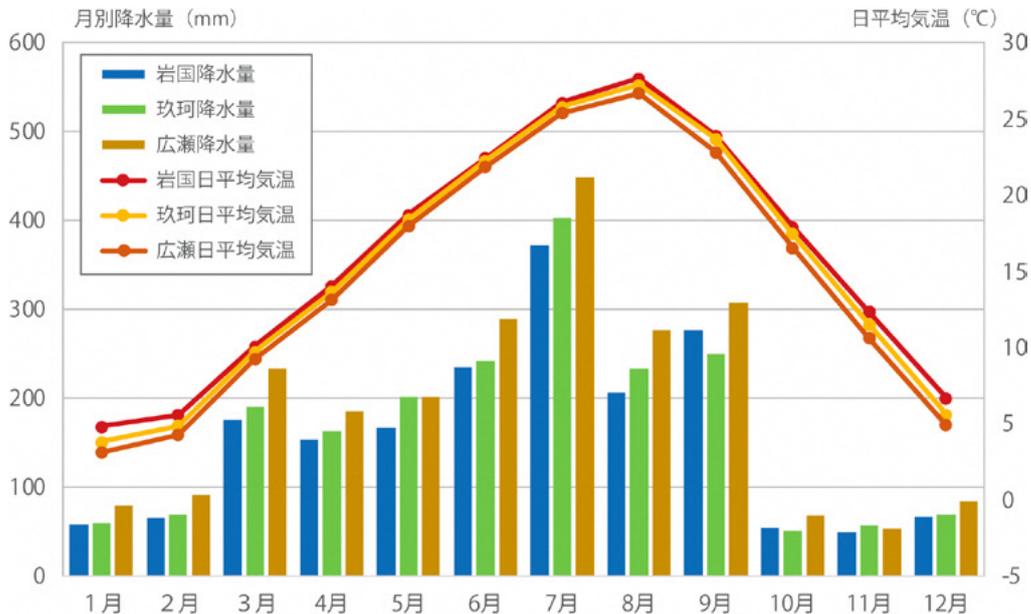


図1-7 気温と降水量(資料 気象庁・過去の気象データより作成 ※平成30年(2018)～令和4年(2022)の数値の平均値)

## 2. 社会的環境

### (1) 町村合併の経緯

現在の岩国市は、平成18年（2006）に岩国市、由宇町、玖珂町、周東町、美和町、美川町、本郷村、錦町が合併して誕生しました。

それ以前の経緯としては、明治22年（1889）の市制・町村制の施行により、現在の市域内には29町村が置かれました。

岩国市は、明治38年（1905）に岩国城下町を含む岩国町と横山村が合併し岩国町となり、昭和15年（1940）には、錦川下流域に位置する岩国町、麻里布村、川下村等の5町村が合併し、岩国市が誕生します。昭和28年（1953）の町村合併促進法の施行により、昭和30年（1955）には、岩国市は藤河村等の周辺7村を編入して市域を広げました。

由宇町は、大正15年（1926）に由宇村から由宇町となり、昭和30年（1955）に神代村神東地区を編入します。

同年、高森町と祖生村等4村の合併により周東町が、広瀬町、深須村、高根村の合併により錦町が誕生します。

美和町は、昭和30年（1955）に秋中村と賀見畑村が合併し美和村となり、翌年、坂上村と合併し、美和町となります。

美川町は、昭和30年（1955）に桑根村と河山村が合併し美川村となり、昭和34年（1959）に町制施行により美川町となります。

本郷村は、明治22年（1889）から名を変えておらず、明治44年（1911）に河波村波野を編入しました。

そして、平成18年（2006）には、山口県東部の広域都市圏を形成していた上記1市6町1村の合併により、現在の岩国市となりました。

現在でも、旧市町村の範囲はそれぞれ、岩国、由宇、玖珂、周東、美和、美川、本郷、錦地域と呼ばれています。



図1-8 旧市町村の位置  
（『錦川下流域における岩国の文化的景観保存調査報告書』（平成31年（2019））より引用）





## (2) 土地利用

本市の土地利用は、市域の84.6%が森林で最も多くを占めます。次に多いのが田4.7%、建物用地4.5%となっています。田とその他農地は、瀬戸内海沿いや玖西盆地を中心とした島田川沿いにまとまっている程度で、中北部の山間地では狭い谷ごとに農地の分布が見られます。

建物用地は、岩国駅周辺や玖珂駅、<sup>す</sup>周防高森駅、<sup>もり</sup>錦町駅周辺に集中しています。それぞれ合併前市町の中心を担う市街地です。

なお、建物用地が集中している南部には、岩国都市計画区域と岩国南都市計画区域が指定されています。

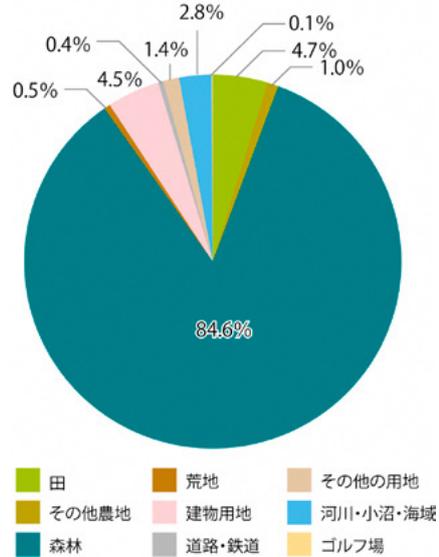


図1-11 土地利用の内訳(令和3年(2021))  
(国土数値情報『土地利用細分メッシュデータ』より作成)

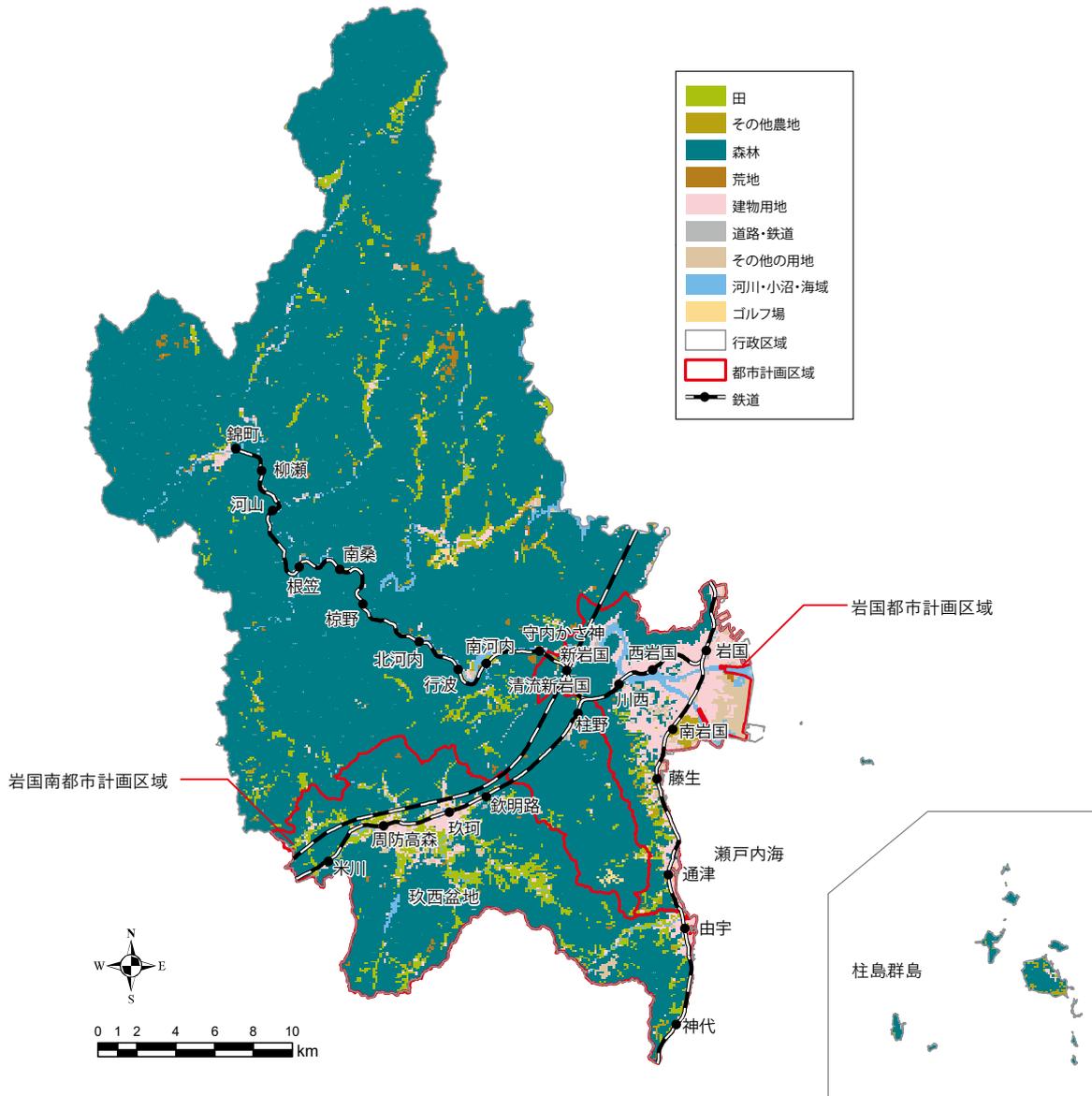


図1-12 土地利用現況(令和3年(2021)) (国土数値情報『土地利用細分メッシュデータ』より作成)

### (3)人口動態

人口は、昭和60年（1985）から現在にかけて減少傾向が続いており、昭和60年（1985）には16万人だった人口が令和2年（2020）には13万人を下回っています。

世帯数は、平成17年（2005）をピークに減少に転じており、令和2年（2020）には57,911世帯となっています。

少子高齢化の状況を見ると、老年人口（65歳以上の人口）比率は、上昇傾向が続いており、令和2年（2020）には35.7%と高い比率を占めています。一方で、年少人口（15歳未満の人口）比率は、下降傾向が続いており、昭和60年（1985）には20.5%だったものが、令和2年（2020）には半分近い11.2%まで下がっており、少子高齢化が進行しています。

将来人口推計では、令和12年（2030）には約11万人、令和22年（2040）には約9万人と大きく減少する見通しとなっています。高齢化率も上昇傾向が続き、令和12年（2030）には39.3%、令和22年（2040）には43.4%という推計となっています。

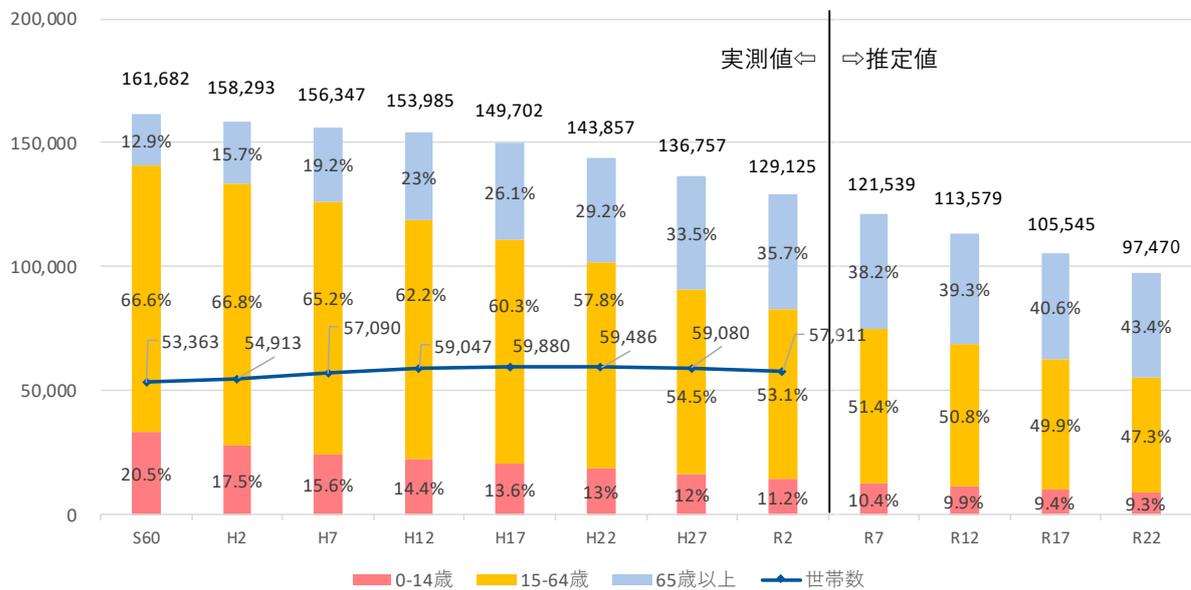


図1-13 人口と世帯数の推移（『国勢調査』（5年ごと）、『日本の地域別将来推計人口』（平成30（2018））より作成）

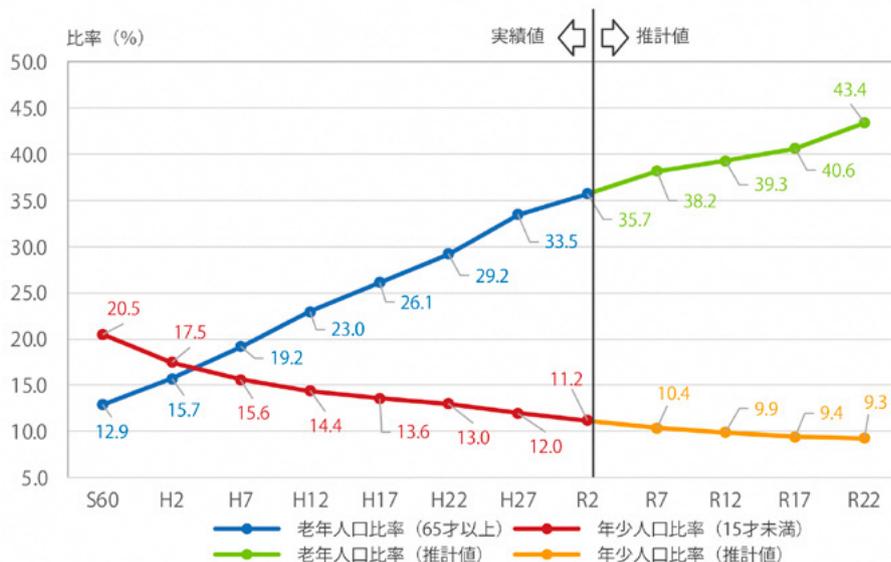


図1-14 少子化・高齢化の推移（『国勢調査』（5年ごと）、『日本の地域別将来推計人口』（平成30（2018））より作成）

## (4) 交通機関

### 1) 近世までの交通網

本市は、古代から山陽道が通り、安芸・周防の国境に当たる交通上の重要な場所に位置します。

近世には、錦川の水運・瀬戸内海の海運に加え、毛利家本藩の萩とのネットワークを支える山代街道や岩国往来、瀬戸内海の重要な港町である上関・室津とのネットワークを支える小瀬・上関往還など、多くの街道が整備されました。

その中でも、山陽道をはじめとした陸運と錦川を介した水運の交差する地に、岩国城下町が整備され、流通往来により都市の営みが盛んとなりました。



図1-15 街道図

## 2) 現代の交通網

市内の交通網は、瀬戸内海沿岸や各地域間を国道によりネットワークされているとともに、南部には山陽自動車道、北部には中国自動車道が通り、複数のインターチェンジを有することから、広域の道路網とも結ばれています。

鉄道では、広域網として山陽新幹線が通り、市内には新岩国駅が置かれますが、在来線とは連絡していません。瀬戸内海沿いにJR山陽本線、玖珂・周東地域を經由して徳山駅と結ぶJR岩徳線、錦川に沿って北部地域と結ぶ錦川清流線が通っています。

また、岩国基地内に岩国錦帯橋空港が整備され、東京・羽田空港や沖縄・那覇空港と結ぶとともに、新港地区には岩国港が整備され、柱島等との離島と連絡船が往来しています。



図1-16 交通環境（『第3次岩国市総合計画』(令和5年(2023)）より引用）

## (5) 産業

### 1) 産業構成

#### ① 就業人口

産業別の就業人口は、平成7年(1995)をピークに減少傾向が続いています。

産業別の就業人口の割合は、平成2年(1990)には、第一次産業9.2%、第二次産業33.3%、第三次産業57.4%でした。その後、第一次産業、第二次産業ともに減少傾向が続き、令和2年(2020)には、第一次産業は3.1%、第二次産業も26.0%まで落ち込み、代わりに第三次産業が68.2%まで増加しています。

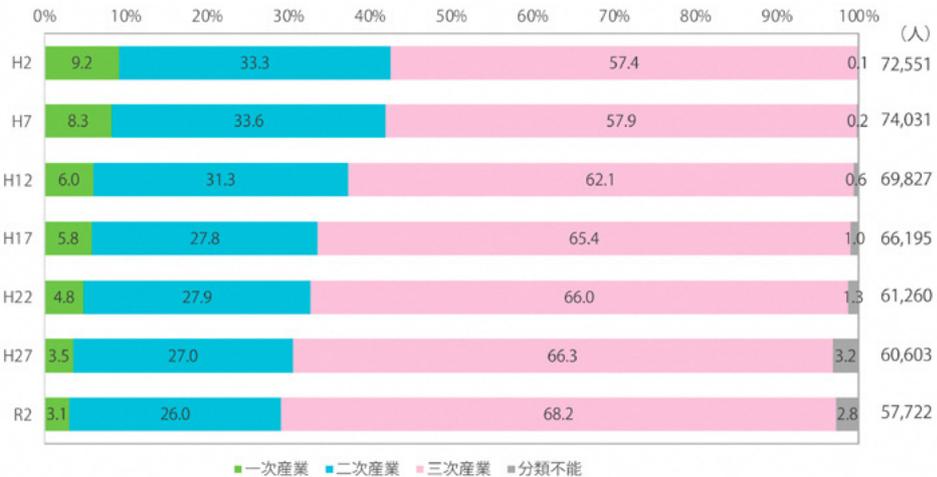


図1-17 産業別就業人口の推移(『国勢調査』(5年ごと)より作成)

#### ② 第一次産業

##### ア) 農業

本市では、平安期頃から本郷・錦・美和・美川地域を中心に「周防山代庄」と称され、<sup>す おうやましろのしょう</sup>狭い谷地を開墾しながら農業が営まれてきました。

平成17年(2005)には5,406戸あった農家数は令和2年(2020)には3,310戸まで減少しています。

大規模な農地が少ないこともあり、農家のうち半数以上を自給的農家が占めています。

瀬戸内海沿いは江戸時代を通した干拓により整備された農地が広がり、江戸時代より、れんこん栽培が盛んです。『作物統計』(平成30年(2018))では、れんこん生産量は全国5位であり、中国地方では最大です。

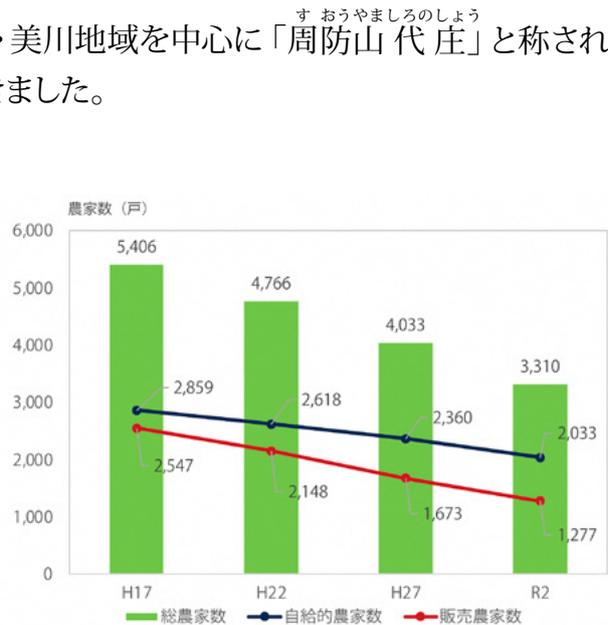


図1-18 農家数の推移(『農林業センサス』(5年ごと)より作成)  
 ※販売農家: 経営耕地面積30a又は農産物販売金額50万円以上の農家  
 自給的農家: 経営耕地面積が30a未満かつ農産物販売金額50万円未満の農家

## イ) 林業

本市は、市域の8割以上を森林が占めており、そのうち88.5%（令和2年（2020））が私有となっています。

平成22年（2010）には林野面積が71,268haとなり、以降、ほぼ横ばいが続いています。

令和2年（2020）の所有形態別の林野面積では、独立行政法人等が2.3%、都道府県が0.04%、森林整備法人が2.4%、市町が4.3%であり、林野面積のうち公有比率はわずか9.0%、国有林は2.5%（林野庁2.5%、林野庁以外の官庁0.02%）となっています。

樹種別の民有林の状況では、天然林：人工林が1：3の割合で、人工林ではスギ・ヒノキが多くを占め、天然林では、マツ類とクヌギ・ナラを除く広葉樹が多くを占めています。

近世期には錦川上流域の豊かな森林資源を背景に、関西圏へ寺社等の材木として供出するなど、毛利家本藩における重要な産業を支えてきました。

なお、森林の一部については自然公園に指定されています。島嶼部には、瀬戸内海国立公園があり、寂地山を中心とした市北部の山間地には、西中国山地国定公園や、隣接して羅漢山らんざん県立自然公園があります。

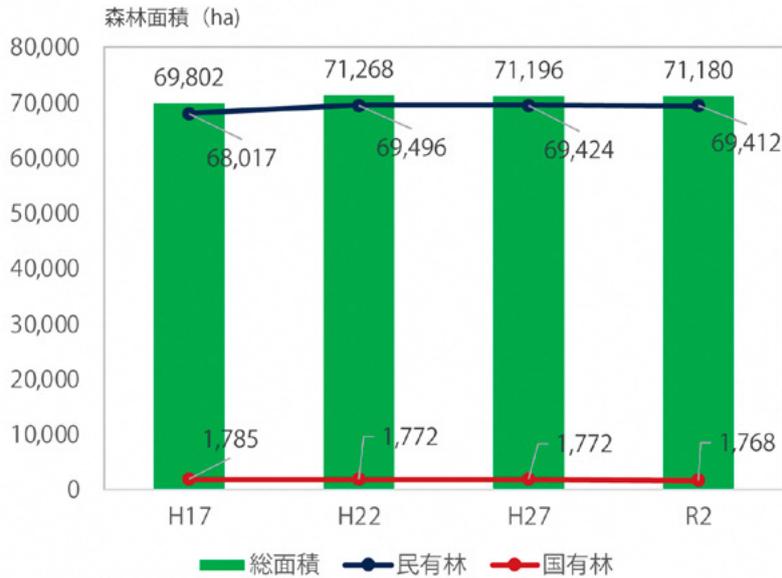


図1-19 林野面積の推移（『農林業センサス』（5年ごと）より作成）

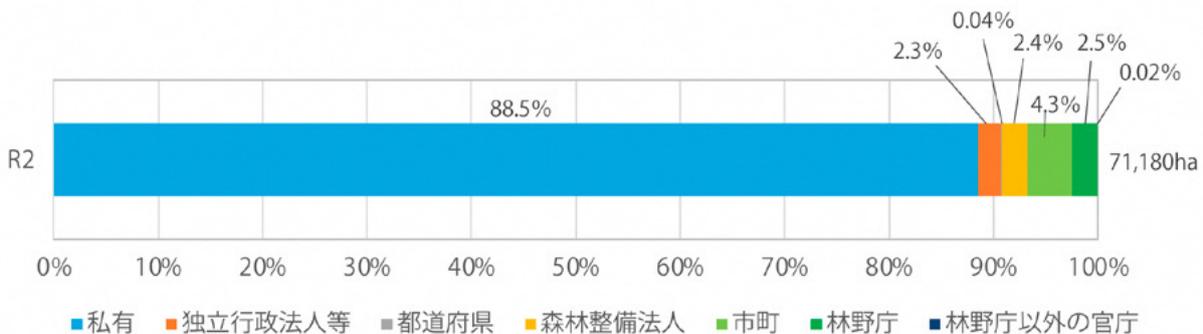


図1-20 令和2年所有形態別林野面積割合（『農林業センサス』より作成）

## ウ) 漁業

岩国地域及び由宇地域は、瀬戸内海に面しており、柱島等の島嶼部も含め、海面漁業が営まれています。平成30年（2018）の時点で総経営体数は201ですが、その他の漁業と釣が過半を占めています。

経営体数や就業者数は、年々減少傾向が続いており、平成20年（2008）から平成30年（2018）までに55%近くまで減少しています。平成30年（2018）の地域別の経営体数は、岩国地域（島嶼以外）が94、柱島が17、由宇地域が38となっています。

島嶼部の柱島ではヒジキ等が名産であるとともに、瀬戸内海沿岸の干潟や錦川の汽水域におけるアサリやシロウオ、錦川流域の河川におけるアユなど、特徴ある漁業も行われています。

漁業者の高齢化が進み、その数は減ってきているものの、車エビ・ガザミ・カサゴ・マダイ・アユ・アマゴ・シロウオなどの稚魚放流にも力を入れ、海底清掃・海浜清掃・森づくりなどにも取り組んでいます。

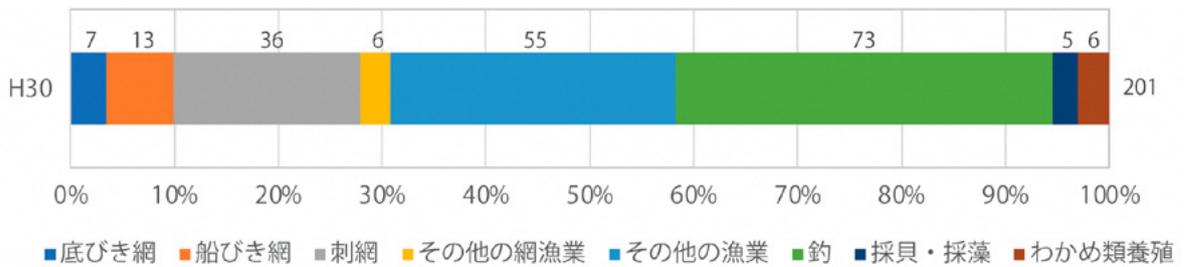


図1-21 主とする漁業種類別経営体数（『漁業センサス』（平成30年（2018））より作成）

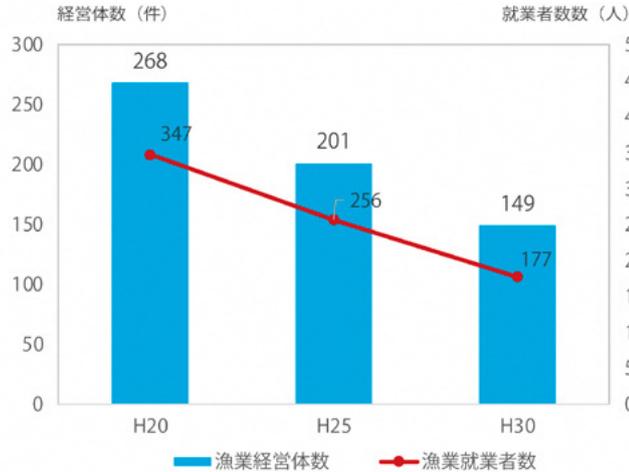


図1-22 海面漁業経営体数・就業者数の推移（『山口県の漁業』より作成）



瀬戸内海での漁業（柱島）



錦川流域の河川ではアユ釣がさかん（美川町南桑）

### ③第二次産業

本市の工業は、武士の職業転換を支援し近代化に対応するために、吉川家により設立された義済堂ぎせいどうによる明治6年（1873）の製糸工場開設に始まります。

錦川の豊かな水と瀬戸内海に面する地理的要因から、臨海部の埋立地において大規模な工業誘致を行い、昭和2年（1927）に化学繊維工場、その後に製紙工場と紡績工場が立地し、以降、現在まで本市の工業を担っています。

また、西部に位置する山陽自動車道玖珂インターチェンジ周辺に、交通便利を生かした工業団地が整備され、瀬田工業団地せたとテクノポート周東として多くの事業所が稼働しています。

平成23年（2011）からの令和2年（2020）までの事業所数と製造品出荷額の推移を見ると、事業所数は全体として減少傾向にあり、直近5カ年では横ばいで推移していましたが令和2年（2020）で前年よりも10件減少しています。製造品出荷額は、概ね3,000億円以上を維持しており、安定的な事業活動が展開されています。

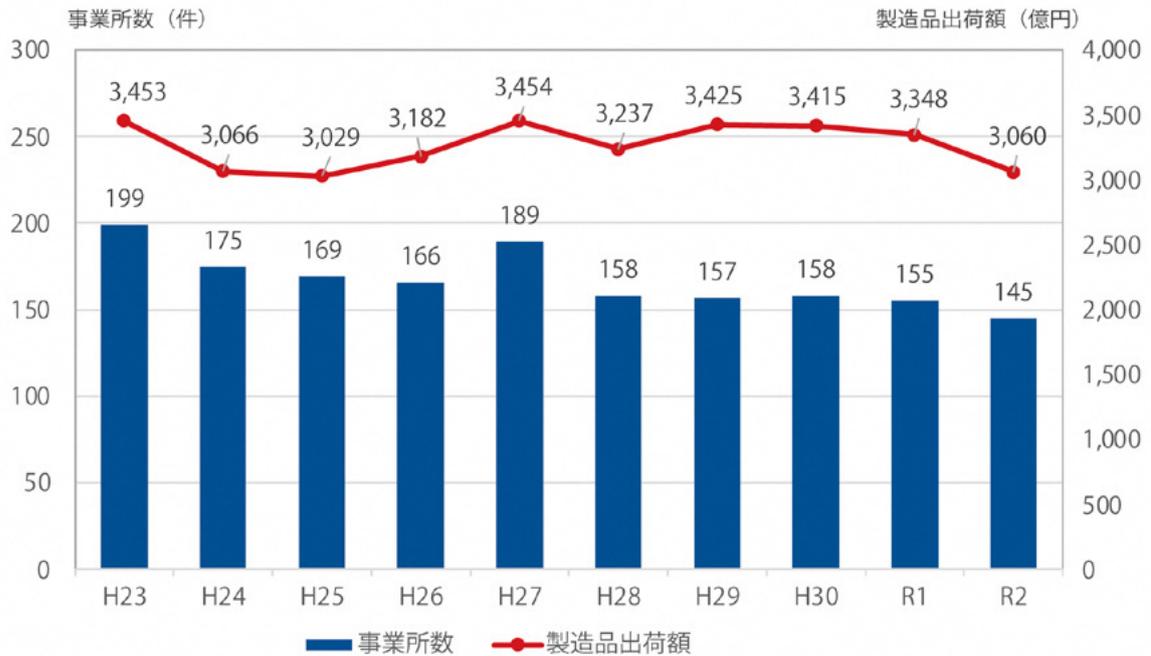
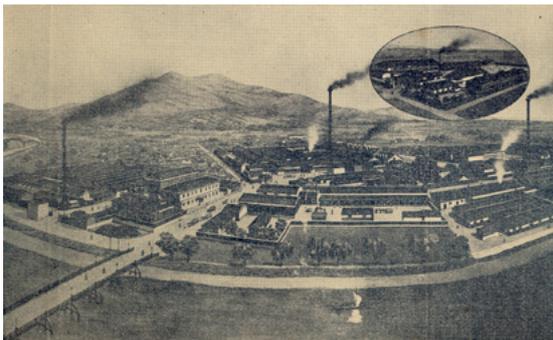


図1-23 事業所数及び製造品出荷額の推移（『工業統計調査・経済センサス』より作成）



（株）義済堂（大正14年（1925）、岩国徴古館蔵）



臨海部に展開する製紙工場

#### ④第三次産業

第三次産業の事業所は、令和3年（2021）の経済センサスによると、4,127件あり、そのうち最も多い事業所が「卸売業・小売業」で30.8%（1,271件）となっています。ついで、「宿泊業、飲食サービス業」が11.4%（469件）、「生活関連サービス業、娯楽業」が11.1%（458件）と続いています。

卸売・小売業の商業事業所数は平成24年（2012）以降、微増傾向にありましたが令和3年（2021）は減っており、年間商品販売額も同様の傾向で、令和3年（2021）は2,275億円となっています。

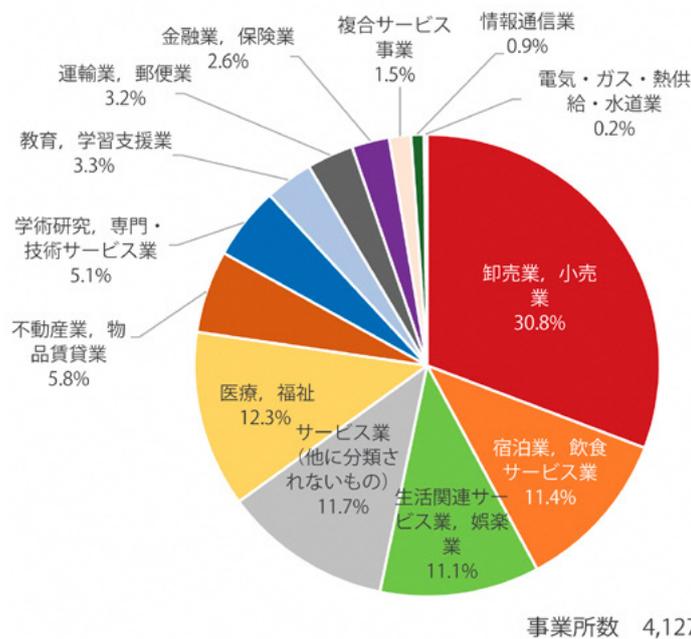


図1-24 第三次産業の事業所の構成（『経済センサス』（令和3年（2021））より作成）

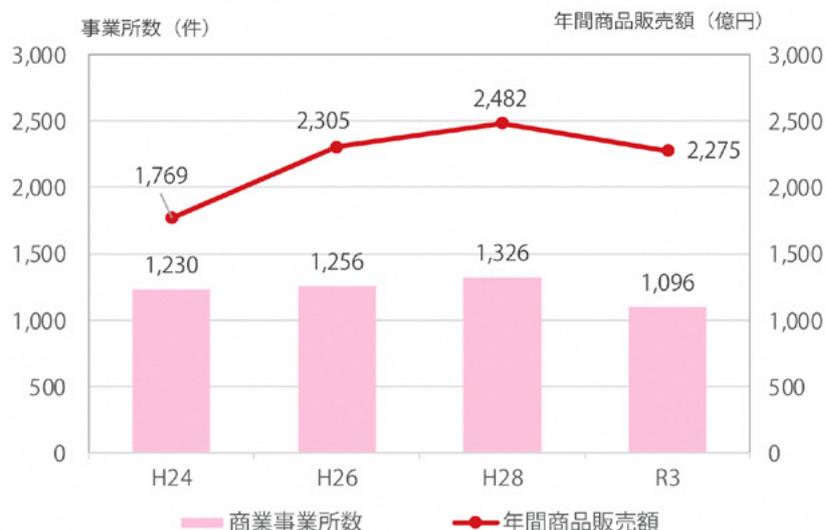


図1-25 卸売・小売事業所数及び年間商品販売額の推移（『商業統計・経済センサス』より作成）

## 2) 観光

観光入込客数は、コロナ禍前の令和元年（2019）までは年間300万人を越えて推移していました。コロナ禍に入り、移動制限の影響もあり、令和2年（2020）から3年（2021）にかけては130万人にとどまっています。観光客の県外・県内の内訳は、ほぼ7：3であり、圧倒的に県外からの観光客が多い状況です。

『山口県観光動態調査』（各年）によると、外国人観光客の推移として、コロナ禍前までは増加傾向が続き、令和元年（2019）には8万人近くが訪れていました。その国や地域の内訳は、台湾（19,760人）が最も多く、ついでアメリカ（11,270人）、香港（6,633人）、韓国（5,046人）、中国本土（4,539人）となっており、中国・台湾等のツアー客に加え、米軍基地を有する都市でもあることから、アメリカ人観光客も多く見られます。

市内の地域別では岩国城下町が7割近くを占め、施設別には錦帯橋、岩国城、岩国城ロープウエー、吉香公園を訪れる観光客数が多い状況です。

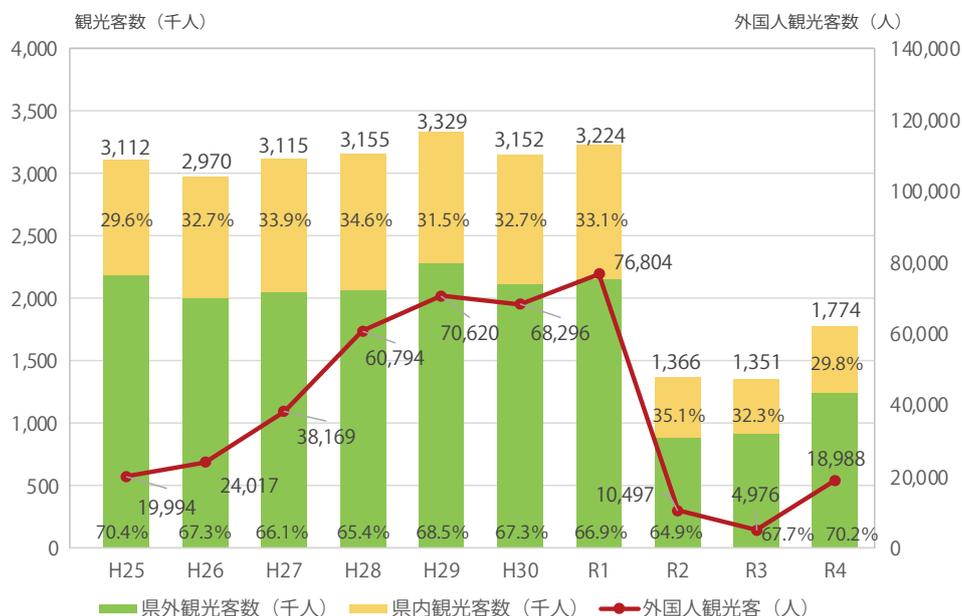


図1-26 観光入込客数の推移（『山口県観光動態調査』より作成）

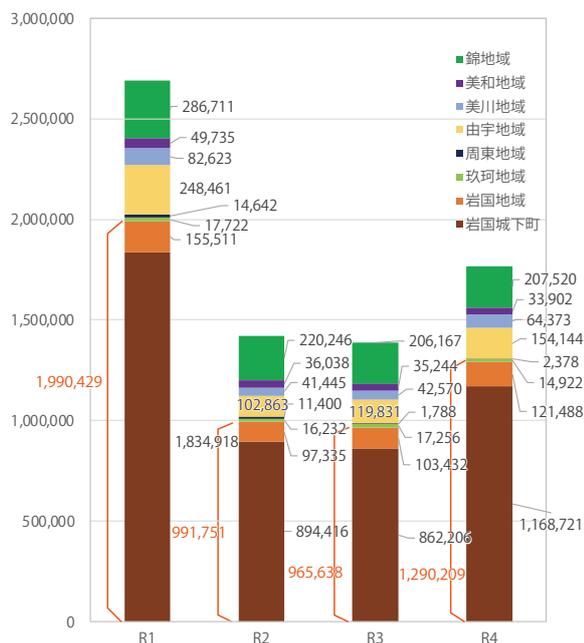


図1-27 地域別入込客数の推移（『山口県観光動態調査』より作成）

表1-2 岩国城下町の施設別観光客数（『山口県観光動態調査』より作成）

施設	観光客数 (人)			
	R1	R2	R3	R4
錦帯橋	620,301	294,765	269,027	375,527
岩国城ロープウエー	383,970	187,940	194,722	265,535
吉香公園	354,419	168,747	169,384	235,748
岩国城	168,993	82,701	82,842	112,122
岩国シロヘビの館	165,454	81,598	75,952	96,152
旧目加田家住宅	44,775	24,068	18,769	27,384
岩国徴古館	39,104	21,523	22,723	20,503
観光物産交流センター「橋の駅」	21,618	8,956	6,420	11,650
松がね	16,621	13,345	12,949	12,327
柏原美術館（旧岩国美術館）	10,744	6,058	5,333	6,074
吉川史料館	7,826	3,991	3,125	4,824
五橋文庫	1,093	724	960	875



図1-28 岩国市観光マップ 岩国市の観光資源と交通基盤図を加筆（出典：『岩国市観光ビジョン』）

### 3. 歴史的環境

#### (1) 歴史

##### 1) 原始(旧石器・縄文・弥生時代)・古代(古墳・飛鳥・奈良・平安時代)

本市内に人の営みがみられ始めたのは、約3万年前です。このことを示す旧石器時代の遺跡が錦地域の宇佐平遺跡、冠遺跡、周東地域の用田遺跡などで確認されています。中でも冠遺跡は広島県にもまたがる冠高原に立地する遺跡で、石器の石材となる安山岩の採取および加工の場であったことが、広島県側の発掘調査で明らかになっています。

縄文時代の早期には周東地域の用田遺跡、河池遺跡で早期の押型文土器が出土しています。また、本郷地域には郷遺跡があり、後期の土器が出土しており、その中には福田式や中津式といった他地域の土器も見つかっています。

弥生時代では、前期の遠賀川式土器が玖珂地域の筏山遺跡で出土しています。中期では本郷地域の建立寺遺跡、岩国地域の大門寺山遺跡、周東地域の河池遺跡、玖珂地域の柳井田遺跡など、多くの遺跡が市内各地で確認されています。後期では、集落を丘陵地上に展開する高地性集落が登場します。玖珂地域の清水遺跡は二重ないし、三重に囲まれた堀を有する高地性集落として知られています。

古墳時代の前期末から中期初頭には玖珂地域で筏山古墳がつけられました。筏山古墳は、昭和30年(1955)、国道2号線の工事中に発見されたものであり、全体の形状は不明ですが、石室内から人骨が出土しています。緊急発掘調査後、石室は玖珂中学校の裏山に移築保存されました。そして中期には周東地域の用田古墳群の用田3号墳では把手付椀、玖珂地域の太田遺跡では陶質土器の高坏が出土しており、朝鮮半島とのつながりが伺えます。後期には、周東地域では北方古墳、玖珂地域では白田古墳など、市域の西部を中心に横穴式石室を有する古墳が展開します。

本市は古代より周防国に属し、養老5年(721)に熊毛郡から分立された玖珂郡に市域が含まれます。玖珂郡内には、50戸を単位とした郷が設置され、本郷地域、美川地域では大野郷、美和地域では伊美郷、岩国地域では石国郷、多太郷、駅家郷、由宇地域では由宇郷、玖珂地域では野口郷、玖珂郷、周東地域では柞原郷があったとされます。また、古代山陽道が整備され石国駅家と野口駅家の二駅が、現在の市域の中に設置されました。

平安時代になると、岩国地域では石国庄、石国本庄が成立し、その中から石国氏が力を持つようになります。石国氏は平氏と結びつき、勢力を拡大していきました。



清水遺跡(出典:『清水遺跡』(山口県教育委員会、昭和63年(1988)))



筏山古墳(発掘調査前写真)(岩国市蔵)



図1-29 岩国市内の主な遺跡分布等(原始・古代)

## 2) 中世 (平安時代後期～戦国時代)

中世、岩国地域では石国氏が没落したあと、清縄氏(後の弘中氏)が台頭し、錦川河口部に創建した白崎八幡宮を拠点に勢力を伸ばしていきました。この弘中氏の勢力域には、中津居館跡があり、遺跡として残っています。港湾的集落と居館の時期の二時期が発掘調査で確認されました。遺物は一括出土銭のほか、多量の土器、木製品などが出土していません。

また、近世に岩国城下町となる横山の地には、大内氏によって永興寺が建立され、寺院としてだけでなく安芸進出の拠点としての機能も有していました。

市北部の錦、美川、本郷、美和地域では山代庄が中世に成立します。『山代温故録』(安永3年(1774)成立)に収録されている『大永ノ記録』や『竹内正虎記録』など、中世の史料には渋前郷、伊木見(生見)郷、下畑、深川、広瀬郷、宇佐郷、須川郷など村名の記録があり、集落につながる村名が多く見られます。また、これらの村々には高森城跡や成君寺山城跡などの山城も築かれていきました。

市西部の玖珂、周東地域では玖珂庄が成立しており、原畠遺跡などが玖珂庄関連の遺跡と考えられています。

市南部の由宇地域では、石国氏の末裔でもある神代氏が勢力をもちました。

柱島は、鎌倉時代、下鴨神社の荘園でした。南北朝時代には忽那義範が南朝より柱島の地頭職を得るなど、忽那氏の勢力下となっていきました。その後は、能島村上氏に従っていた桑原氏が島での勢力を伸ばしていったと推察されます。

弘治元年(1555)には、毛利元就による周防・長門への侵攻がはじまり、毛利氏の支配を受けるようになりました。



中津居館跡(岩国市蔵)



現在の永興寺山門



高森城跡(岩国市蔵)



原畠遺跡(出典:『玖珂町白田・周東町原畠・熊毛町新畑遺跡』(山口県教育委員会、昭和49年(1974))



図1-30 岩国市内の主な遺跡分布等 (中世)

### 3) 近世 (江戸時代)

慶長<sup>けいちよう</sup>5年(1600)の関ヶ原<sup>せきがはら</sup>の戦いののち、玖珂郡のうち岩国領<sup>いしきみ</sup>※として三万石を与えられた吉川<sup>きつかわひろいえ</sup>広家は、横山の地に岩国城を築き、錦川の対岸であった錦見を含めた本格的な城下町整備を行いました。岩国城は慶長20年(1615)の一国一城令によって壊されることになりましたが、山麓部の吉川家居館<sup>きつかわいかにん</sup>を中心に城下町を形成していきました。その後、延宝<sup>えんぼう</sup>元年(1673)に横山、錦見の両岸をつなぐ錦帯橋が架橋され、両岸の城下町の往来だけでなく、観光やそこから派生する営みを育んでいきました。

また、錦川の下流域では干拓が進められ、綿やれんこんなどの商品作物がつくられるようになりまし。岩国領の北部にあたる美和地域や小瀬では紙づくりが盛んに行われ、「岩国半紙<sup>いわくにはんし</sup>」として全国的にも知られました。岩国領の西、玖珂地域には山陽道が整備され、本陣がおかれて宿場町を形成しました。由宇<sup>いままづ</sup>地域は、今津<sup>やないづ</sup>、柳井津(現在の柳井市)について港が整備されて廻船業が発達しました。

岩国領とならなかった錦地域、本郷地域の全域および美和地域、美川地域、周東地域の一部は毛利家本藩領に属しました。毛利家本藩は宰判<sup>さいばん</sup>という行政区分に分けられており、とくに、広瀬を含む前山代宰判<sup>まえやましろさいばん</sup>と本郷を含む奥山代宰判<sup>おくやましろさいばん</sup>では紙生産が奨励され、毛利家本藩の財政にとって重きをなしていました。この紙生産に偏重した状況は享保17年(1732)に発生した飢饉(享保の大飢饉)で多くの餓死者を出すこととなります。こうした飢饉などの災厄を除くため神楽舞がさかんに行われるようになり、この時期のものが現在にも残る神楽の源流となっています。

※関ヶ原の戦いののち、毛利氏は周防・長門の領主となり、吉川氏は岩国の地を与えられました。やがて藩の体制が整う中、岩国だけは支藩の格(城主格)ではなく岩国領とされました。



吉川家居館(『元朝登城之図』(明治16年(1883)、岸雪江作、岩国徴古館蔵))



江戸時代の廻船絵馬(岩国市蔵)

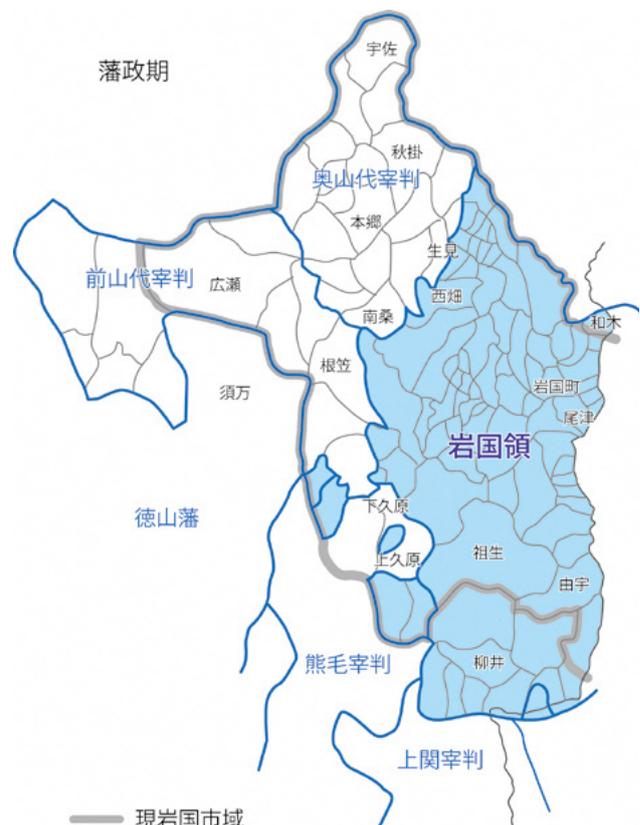


図1-31 岩国市の藩政期の区域割(『山口県市町村史図』より作成)

#### 4) 近代・現代(明治時代以降)

明治2年(1869)の版籍奉還<sup>はんせきほうかん</sup>、明治4年(1871)の廃藩置県<sup>はいはんちけん</sup>により、幕藩体制が終わりを迎えました。明治元年(1868)に岩国領は岩国藩として認可されましたが、明治4年(1871)7月、岩国藩は岩国県となります。そして、同年11月15日に山口県<sup>とよら</sup>、豊浦県<sup>きよすえ</sup>、清末県、岩国県の4県が合併して山口県となり、現在の県域となりました。(町村合併の経緯はP.10を参照)

鉄道交通に関しては、明治30年(1897)瀬戸内海沿いに山陽本線が敷設され、麻里布駅(現在の岩国駅)が当時の中心部である岩国城下町から離れた場所に開業したために、麻里布駅と岩国城下町を結ぶ路面電車として、明治42年(1909)に藤岡市助<sup>ふじおかいちすけ</sup>による岩国電気軌道が開業します(昭和4年(1929)に岩徳線と並行路線になるために廃止)。

昭和9年(1934)に岩国と徳山を結ぶ岩徳線が全通し、岩国城下町の東側に岩国駅(現在の西岩国駅)が開業します。昭和35年(1960)、錦川沿いを通り北上する路線として、岩日線<sup>がんいち</sup>が開業します。岩日線は、昭和62年(1987)に第三セクター鉄道錦川清流線として錦川鉄道株式会社による営業へ転換し、岩日北線<sup>がんいちきた</sup>として整備されたルートの一部は、観光用のトロッコ遊覧車「とことこトレイン」として営業しています。

また、広域の交通網として、昭和50年(1975)に山陽新幹線の新駅として新岩国駅が開業し、平成24年(2012)に岩国錦帯橋空港が開港しました。

自動車交通に関しては、山陽自動車道について、昭和63年(1988)に岩国インターチェンジから広島方面が、平成4年(1992)に周南市方面が開通し、本市南部においても高速自動車網が形成されます。玖珂インターチェンジ周辺には2つの工業団地が立地しました。

江戸時代にかけて拓かれた干拓地では、近代において宅地・商業地の開発が進み、特に沿岸部では大規模工場の進出や港湾や空港が整備されます。

工場については、昭和初期には化学繊維工場や製紙工場が立地し、昭和33年(1958)には大規模な石油化学コンビナートが稼働しました。

このように、人やモノを運ぶ交通網や沿岸部の開拓の整備によって産業が発展してきました。

岩国城下町は、明治以降も人々の生活の場、そして観光地として賑わいを見せます。

錦帯橋が大正11年(1922)に国の名勝に指定されて以降、風致地区、景観条例等の景観保全施策が講じられ、錦帯橋と錦川、両岸の城下町と山を含む一帯が令和3年(2021)に重要文化的景観に選定されました。こうした錦帯橋を中心とした景観保全の取り組みと観光地としての魅力づくりが現在も進められています。



雪の中を走る岩国電気軌道(大正時代、岩国徴古館蔵)



岩国錦帯橋空港(出典:岩国市ホームページ)

## (2) 岩国市の歴史に関わりのある主な人物

### 1) 吉川広家 (永禄4年(1561)～寛永2年(1625))

吉川広家は、岩国領の初代領主です。毛利元就の次男である吉川元春の三男として生まれました。天正15年(1587)に父、長兄の死去により家督を相続しています。日野山城(現在の広島県)等の所領を継承し、天正19年(1591)には豊臣秀吉の命により月山富田城(現在の島根県)に入り、出雲3郡・伯耆3郡・安芸1郡及び隠岐一国に及ぶ14万石を支配します。文禄・慶長の役にも出陣し、秀吉から日本槍柱七本の1人と賞讃され、武功の吉川と称されます。

関ヶ原の戦いの後、周防・長門2ヶ国に減封された毛利宗家の中で、東の端にあたる岩国領を与えられ、岩国城下町を築きます。領地は藩とはされず岩国領とされ、家臣の扱いとされる中、徳川家康からは岩国城の築城を許されました。

城下では、築城に際し錦川の治水事業や、錦川河口域の開作を実施し、錦川下流域に展開する都市づくりに取り組みました。



吉川広家(出典:岩国市ホームページ)

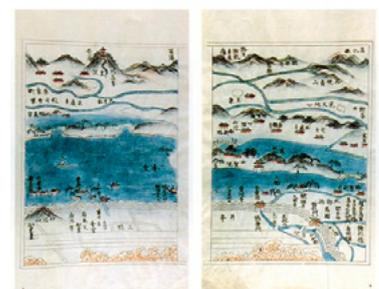
### 2) 吉川広嘉 (元和7年(1621)～延宝7年(1679))

吉川広嘉は、岩国領の第3代領主です。寛文3年(1663)、父広正の隠居により家督を継ぎます。生来病弱であったため京都で療養し、諸学と京風を身につけ、狩野探幽等とも交流がありました。読書に親しみ、武芸を好み、学問心と技術心を重んじた広嘉は、岩国文化の開祖と仰がれています。

最大の業績は、錦川への錦帯橋の架橋事業です。『西湖遊覧志』(中国・明代)の挿図より、錦川に小島のような橋台を作り、そこに頑丈なアーチ型の橋をかけることを着想したとされています。家臣の児玉九郎右衛門を架橋事業に当たらせ、架橋に必要な高度な石積み、木組みの築城技術により、独特の構造を有する錦帯橋がかけられ、延宝元年(1673)に、岩国城下町における長年の願いであった「流されない橋」を実現しました。



吉香公園の吉川広嘉像



錦帯橋の着想の元となったとされる『西湖遊覧志』(中国・明代)の挿図(出典:岩国市ホームページ)

### 3) 吉川経幹 (文政12年(1829)～慶応3年(1867))

吉川経幹は、岩国領の12代領主です。弘化4年(1847)には文教の重要性から養老館を建てています。元治元年(1864)の第一次幕長戦争の際には、毛利家本藩存続のため、幕府との交渉役として両者間の中を取り持ちました。経幹は極秘に岩国を訪れた西郷隆盛らと対面し、毛利家本藩藩主の謝罪状の提出と三家老の切腹などを条件に、長州への攻撃を延期することを請いました。条件が履行されると、経幹は自ら征長総督府が置かれた敵地・広島へ赴き嘆願します。ついに、征長軍は撤兵し、交戦の無いままに第一次幕長戦争は終結に至りました。そして、慶応2年(1866)の幕府軍との再戦のときには毛利家本藩と協力して幕府軍を撃破しています。

慶応3年(1867)に病死しましたが、その事実は秘密にされ、慶応4年(1868)に岩国領が岩国藩として正式に認められた際には、岩国藩初代藩主として大名に列しました。



吉川経幹(岩国徴古館蔵)

### 4) 吉川経健 (安政2年(1855)～明治42年(1909))

吉川経健は、岩国領の最後の領主です。慶応3年(1867)、吉川経幹の死去により跡を継ぎますが、毛利敬親の命により死去が隠されたため、正式に領主となるのは明治2年(1869)となります。戊辰戦争により東北戦争で功績を挙げたことから永世5,000石を与えられ、版籍奉還により知藩事(県令(今日の都道府県知事)の前身)となります。

明治4年(1871)の廃藩置県で免官となり東京へ転居しますが、明治6年(1873)に旧岩国領士族への救済策として義済堂を創設し、自立を助けました。義済堂は、機織り・製糸業を中心に事業を展開し発展しました。



吉川経健(岩国学校教育資料館蔵)

### 5) 杉民治 (文政11年(1828)～明治43年(1910))

杉民治は、毛利家本藩の士分で、吉田松陰の兄です。松陰を物心両面で支えました。

旧名は梅太郎でしたが、明治維新时期には代官として各地で任に当たり、その優れた手腕から「民治」の名を藩主から受けます。

本郷の山代宰判の勘場の代官を務め、明治に入って以降も、山口県の役人として本郷において水路造成など行い多くの功績をあげました。

職を辞して以降は、松下村塾を一時再興しました。



杉民治(本郷歴史民俗資料館蔵)

## 6) 赤禰武人 (天保9年(1838)～慶応2年(1866))

赤禰武人は、柱島の医師・松崎家に生まれます。第3代奇兵隊総督です。安政3年(1856)吉田松陰の門下生になり、翌年、浦氏家臣・赤禰家の養子となります。高杉晋作が奇兵隊を組織するとすぐに入隊し、第3代総督に就任しました。

第一次幕長戦争以降、晋作と考え方の違いを生じるようになります。慶応元年(1865)、西郷隆盛を訪ね、大坂へ赴く中幕府に捕えられるものの、第二次幕長戦争を阻止するため、毛利家本藩と幕府との仲立ちを申し出て釈放されました。しかし、帰国した武人は裏切り者の烙印を押され、柱島で捕えられ、慶応2年(1866)山口で処刑されました。一言も弁明が許されず、獄衣には「真は誠に偽りに似、偽りは以って真に似たり」と記されていました。

晋作は自身の死直前、武人を死なせたことへの後悔を吐露したと伝えられています。



赤禰武人 (おおすみグループ提供)

## 7) 藤岡市助 (安政4年(1857)～大正7年(1918))

藤岡市助は、現在の岩国市錦見に生まれます。東京電気株式会社 (のちの株式会社東芝)、岩国電気軌道株式会社、それぞれの創設者です。最後の岩国領主である吉川経健から奨学金を得て工部大学校電気工学科を卒業し、同大学の教師となります。明治17年(1884)フィラデルフィア万国電気博覧会を視察し、明治25年(1892)日本電燈協会 (のちの一般社団法人日本電気協会) を創設し会長となるとともに、明治29年(1896)東京白熱電燈球製造株式会社 (明治32年(1899)に東京電気株式会社と改称) を創設しました。日本における電球製造をはじめ、電気事業の進歩発達に貢献した人物です。



藤岡市助 (岩国学校教育資料館蔵)

しまたにとくさぶろう  
**8) 嶋谷徳三郎 (慶応3年(1867)～昭和3年(1928))**

嶋谷徳三郎は、帆船業を営む徳右衛門<sup>とくえもん</sup>の長男として、由宇村(現在の岩国市由宇町)に生まれます。20歳にならないうちに米穀売買・米相場・配船その他船舶業務に精通していたとされ、明治22年(1889)、父の死去により家業を継承しました。

和船から蒸気船への将来性を見抜き、多くの財産を投入し、鉄船浦門丸を購入、北海道及び北陸方面の航海にも就航し、成功を収めます。当時、由宇のみならず瀬戸内海帆船業者が没落あるいは転廃業する中、嶋谷汽船は業績を上げ続けました。

蓄積された財貨により、郷里に度々、多くの寄贈をおこない、由宇村政の推進と教育・社会福祉事業に寄与しました。



嶋谷徳三郎(出典:嶋谷海運業史)

うのちよ  
**9) 宇野千代 (明治30年(1897)～平成8年(1996))**

宇野千代は、玖珂郡横山村(現在の岩国市川西)に生まれます。岩国高等女学校(現・岩国高等学校)出身です。

大正・昭和・平成にかけて活躍した小説家、随筆家であり、多才で、着物デザイナーや実業家の顔も持ちます。

大正10年(1921)に『時事新報』の懸賞短編小説で一等に当選し作家デビューしました。昭和11年(1936)にはファッション誌『スタイル』を創刊、戦時中は一旦廃刊しますが、昭和21年(1946)復刊しています。

10年かけて書いた小説『おはん』は継母がモデルとされ、岩国城下町を舞台にした名作です。



宇野千代(岩国学校教育資料館蔵)

## 4. 文化財等の分布状況

### (1) 指定等文化財の分布状況

市内に所在する指定等文化財の件数を下表にまとめます。

国指定・選定文化財が21件（岩国地域18件、周東地域1件、美川地域2件）、国登録有形文化財が11件（岩国地域）、県指定文化財が44件（岩国地域25件、玖珂地域1件、周東地域4件、由宇地域1件、美和地域6件、本郷地域2件、錦地域5件）、市指定文化財が120件（岩国地域30件、玖珂地域13件、周東地域29件、由宇地域3件、美和地域17件、美川地域2件、本郷地域2件、錦地域23件、非公開1件）あり、計196件の指定等文化財が存在します。

有形文化財（建造物）27件が指定等を受けており、このほか彫刻や工芸品、古文書、遺跡、無形の民俗文化財をはじめとし、多種多様な指定等文化財が分布しています。

表1-3 岩国市内の指定等文化財件数（令和5年（2023）2月時点）

種類		国		県	市	合計	
		指定・選定	登録	指定	指定		
有形文化財	建造物	2	11	4	10	27	
	美術工芸品	絵画			4	7	11
		彫刻			3	26	29
		工芸品	7		15	18	40
		書跡・典籍	5		2	4	11
		古文書			2	13	15
民俗文化財	有形の民俗文化財				7	7	
	無形の民俗文化財	2		4	8	14	
記念物	遺跡			2	13	15	
	名勝地	1		3	2	6	
	動物、植物、地質鉱物	3		5	12	20	
重要文化的景観		1				1	
合計		21	11	44	120	196	

※なお、県指定無形民俗文化財「岩国南条踊」は、国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財にも選択されている。

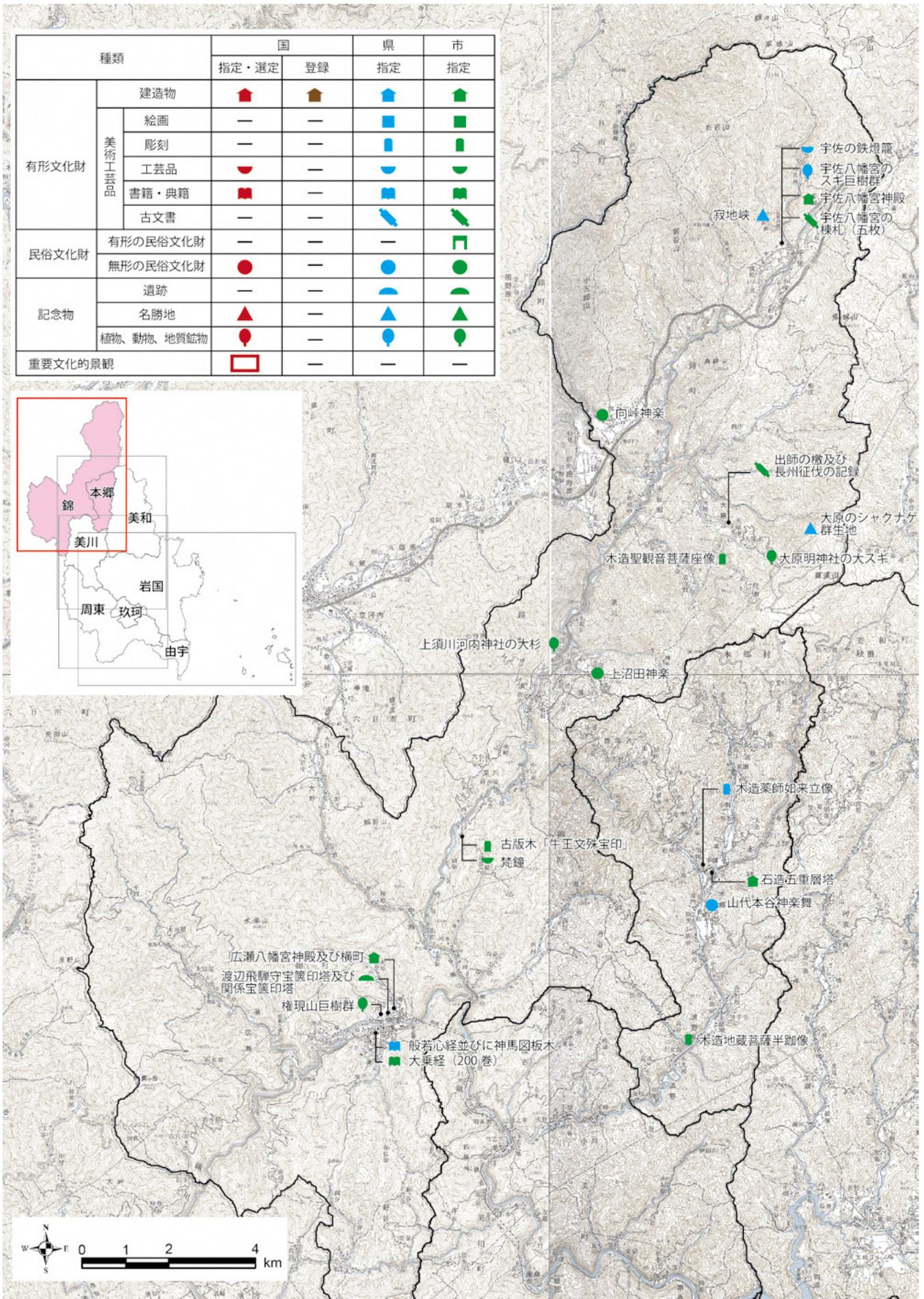


図1-32 指定等文化財の分布(錦・本郷地域)

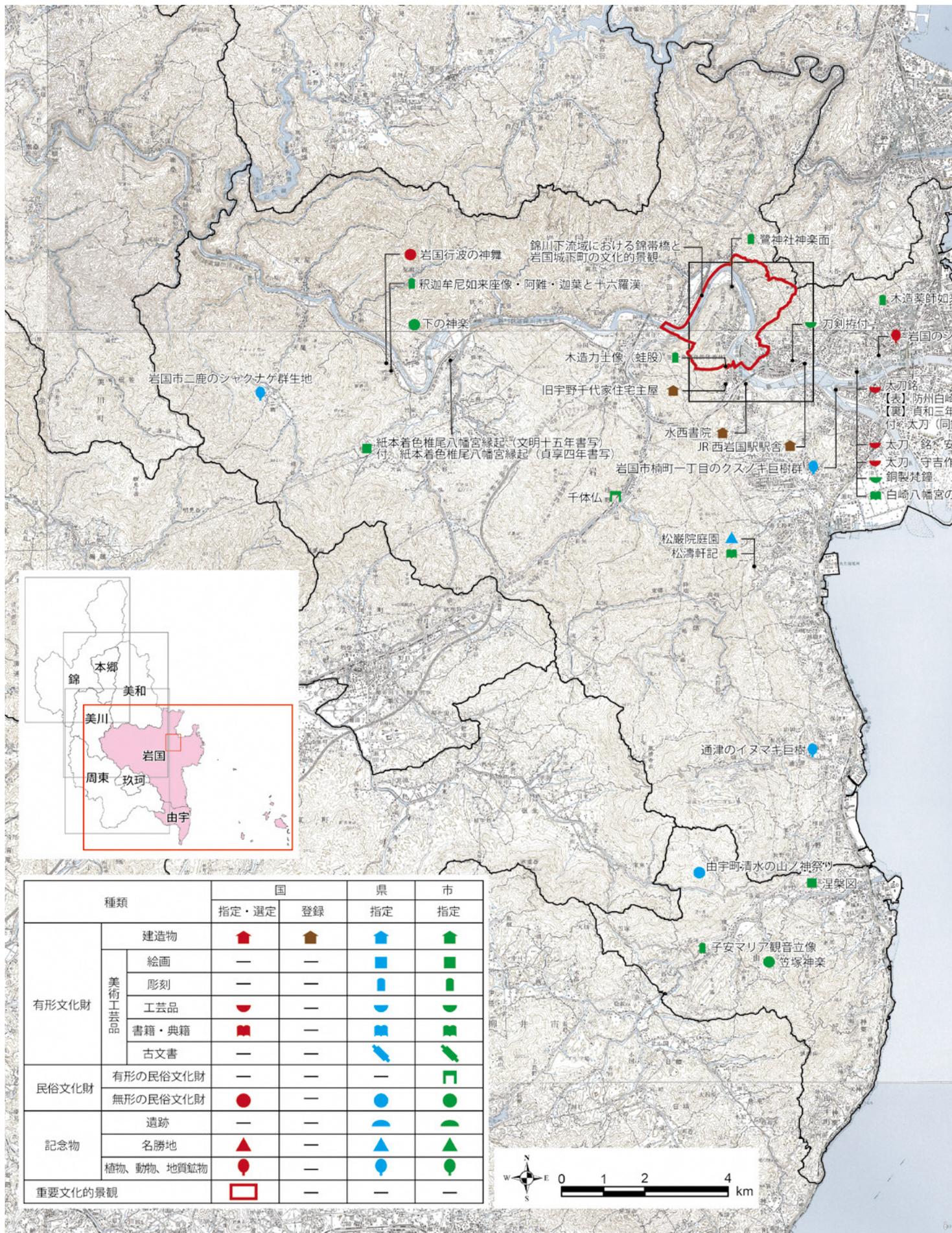
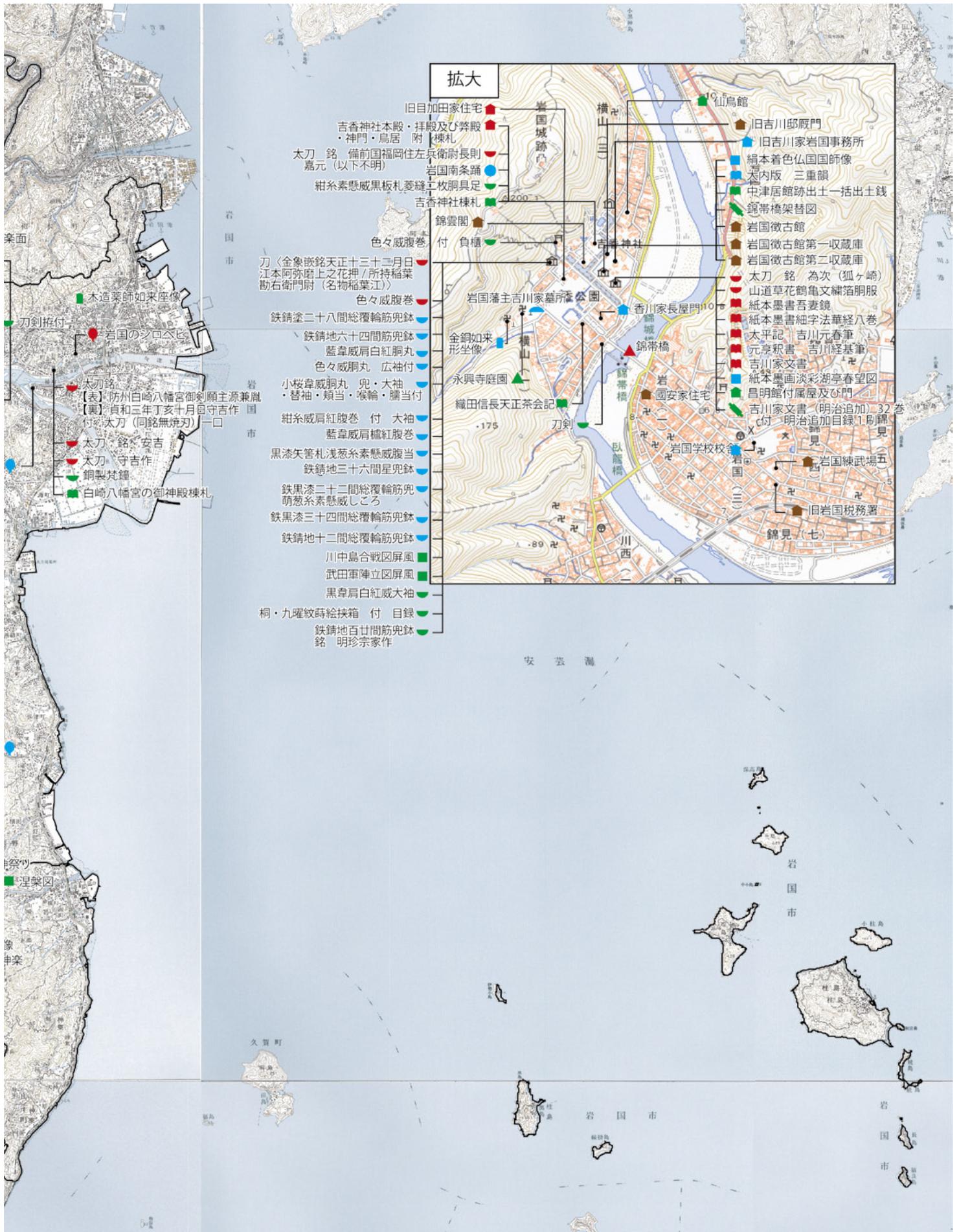


図1-33 指定等文化財の分布(岩国・由宇地域)



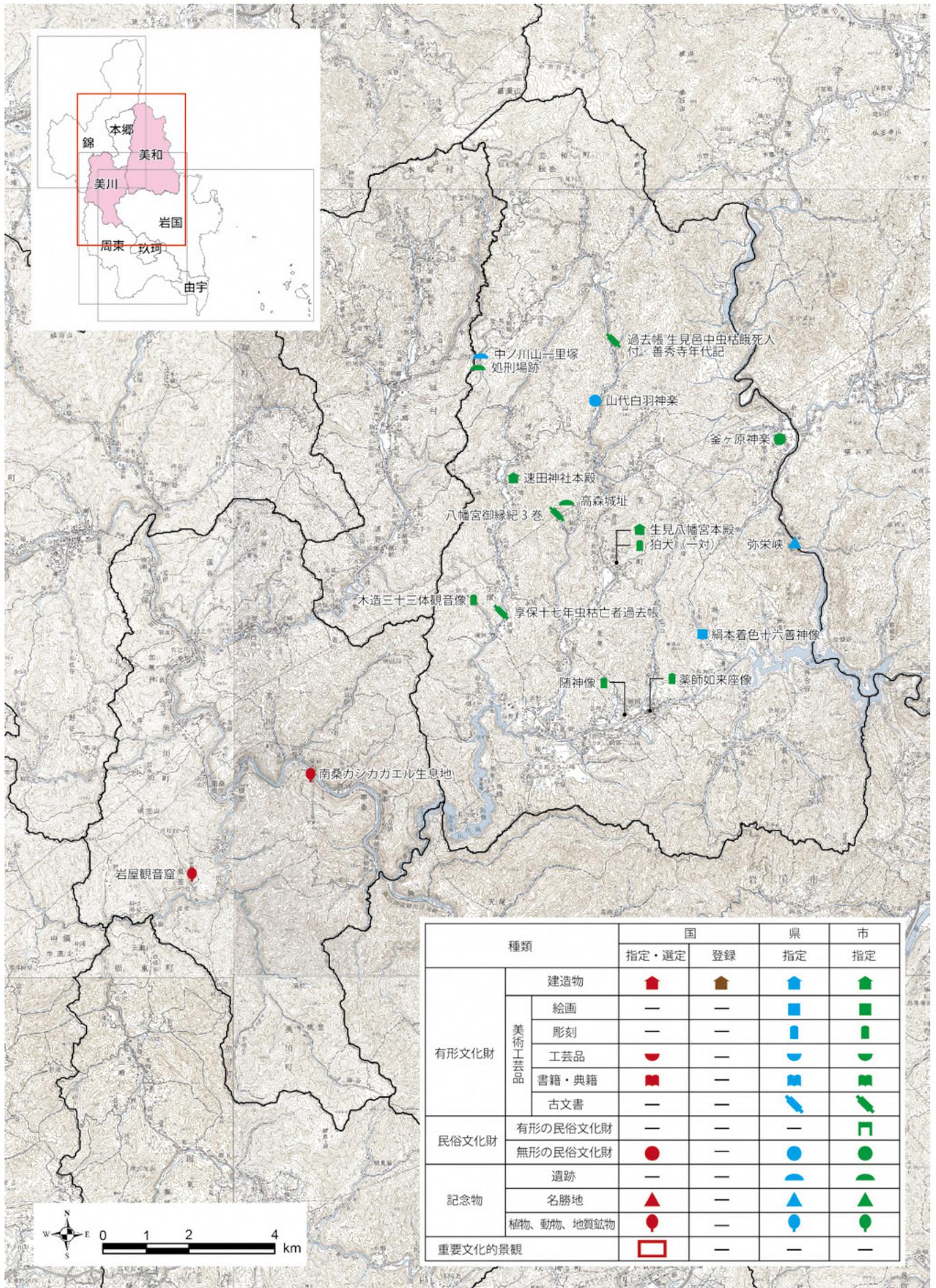


図1-34 指定等文化財の分布(美和・美川地域)

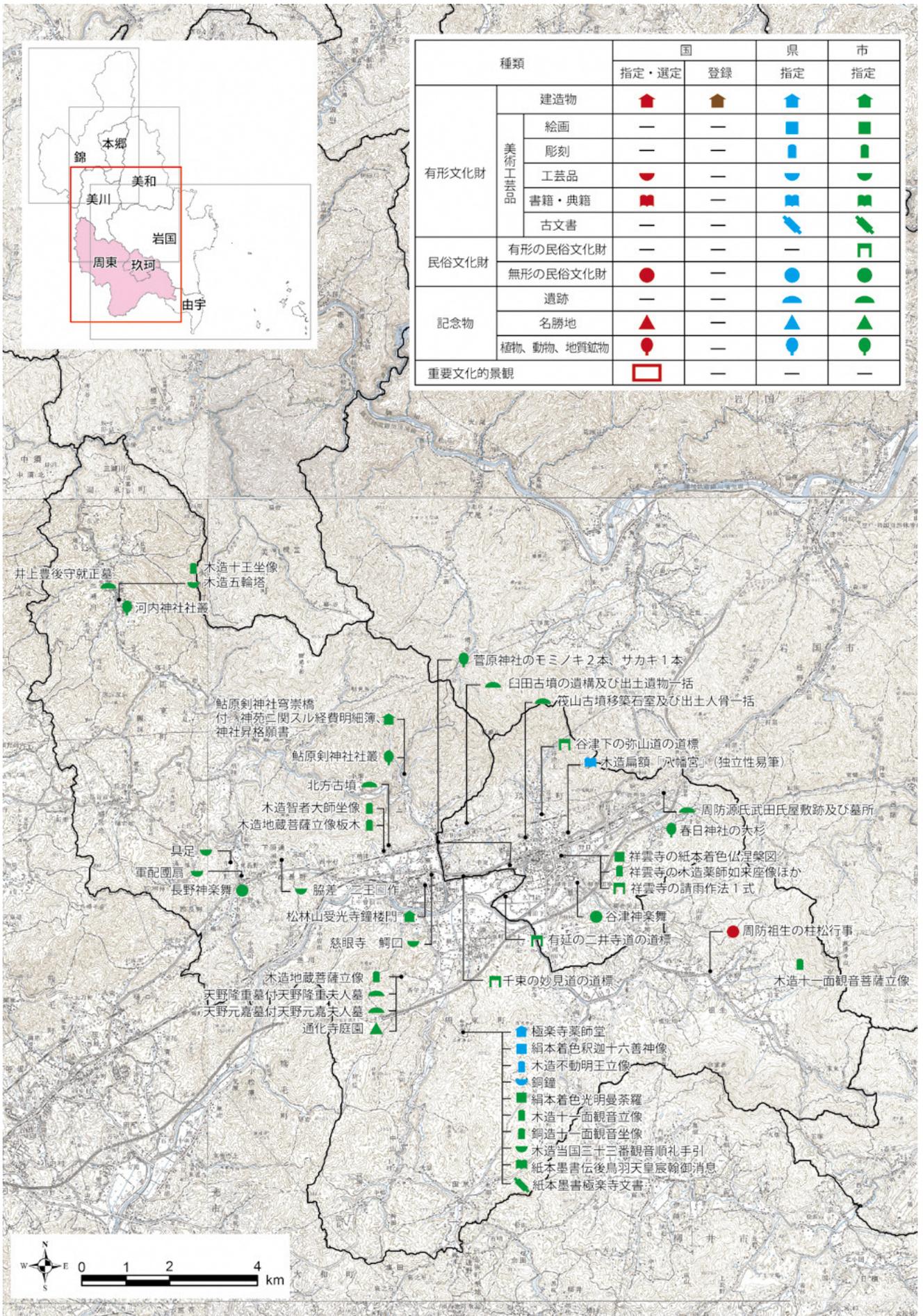


図1-35 指定等文化財の分布(玖珂・周東地域)

## (2) 主な国指定等文化財

### 1) 国宝(工芸品)

#### ① 太刀〈銘為次(狐ヶ崎) 付 黒漆太刀拵〉

身の長さ78.5cm、反り3.4cm、鎌倉初期の備中<sup>ちゅうあおえ</sup>青江作の太刀です。刀身が少しも摩耗せず、打ちおろしのように平肉豊かで、当初の黒漆太刀拵<sup>びつ</sup>が付属しています。

この太刀は、吉川家第一の宝物で、吉川友兼<sup>きつかわともかね</sup>が、梶原景時<sup>かじわらかげとき</sup>の一族を駿河の狐ヶ崎<sup>するが</sup>にて討伐して功をたてた太刀として、以後は用いず家宝として保存されてきたものです。



太刀〈銘 為次(狐ヶ崎) 付黒漆太刀拵〉  
(出典：岩国市ホームページ)

### 2) 重要文化財(建造物)

#### ① 旧目加田家住宅

旧目加田家住宅は、江戸時代後期の建築とみられる木造一部2階建、入母屋造の中流武家の住宅です。

岩国城下町の現在の吉香公園内に位置し、江戸時代における岩国の武家住居の様相を残しています。



旧目加田家住宅(出典：岩国市ホームページ)

#### ② 吉香神社本殿・拝殿及び幣殿・神門・鳥居 附 棟札

吉香神社は、旧領主吉川家の歴代を祀る神社です。現社殿は、享保13年(1728)に白山比咩神社境内に造営されましたが、明治18年(1885)、旧吉川家居館跡の現在地に移転されました。

全国的にも数少ない歴代領主の神霊を祀る神社建築で、岩国領大工の高い技量が窺え、地方における江戸中期の優品です。



吉香神社本殿(出典：岩国市ホームページ)

### 3) 重要文化財 (工芸品)

やまみちくさばなつるかめもんしゅうはくどうふく

#### ① 山道草花鶴亀文 繡箔 箔 胴服

山道草花鶴亀文繡箔胴服は、<sup>あづちももやま</sup>安土桃山時代中期の天正15年(1587)九州平定の功により豊臣秀吉から吉川広家が拝領したものと伝えられています。身幅が広く、広袖であるが振りはありません。<sup>たり</sup>垂領で後は背割になっています。山道文を全面にして雪持芦、同笹、松樹、桐紋、鶴亀文の<sup>ししゅう</sup>刺繡がなされ、さらに金摺箔が施されています。

その意匠技法とも豪華にして精緻、安土桃山時代の初期の形態を示す特色豊かな胴服で保存完好の優品です。



山道草花鶴亀文繡箔胴服 (出典：岩国市ホームページ)

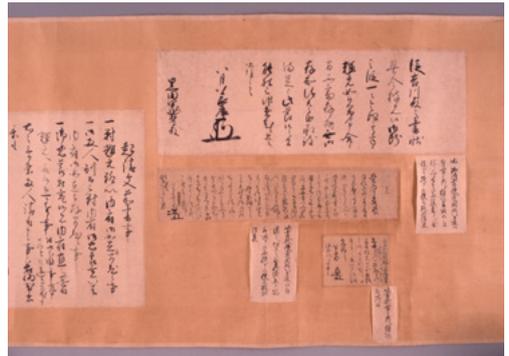
### 4) 重要文化財 (書跡)

きつかわ けもんじょ

#### ① 吉川家文書 (八十六巻ほか)

吉川家文書は、旧岩国領主吉川家所蔵の古文書類の総称で、鎌倉時代から江戸時代の<sup>じょうきやう</sup>貞享年間(1684~1688)に至る総数2393点を収めています。鎌倉~室町時代のものは関東御家人や国人領主層の動向を伝え、戦国・桃山時代のものは毛利氏の中国経営、豊臣秀吉の九州平定、朝鮮出兵などに関する文書として貴重です。

そのほか戦国大名家文書として重要な文書を含んでいます。



吉川家文書 (出典：岩国市ホームページ)

### 5) 重要無形民俗文化財

いわくにゆかば かんまい

#### ① 岩国行波の神舞

行波地区に伝わる神舞です。毎年、神社境内でその一部が上演されますが、七年目のときには、錦川の川原に<sup>かんどん</sup>神殿を建て、さらに約25メートル川上に、高い赤松を一本立て、この松柱に登る舞等を演じます。もともと、神官が主体の<sup>しゃにん かぐら</sup>社人神楽でしたが、明治時代の<sup>しゃ</sup>社家の世襲制度の廃止により里人に伝授されたものです。行波における神舞の年期祭奉納は寛政3年(1791)から始まり7年目ごとに行われ、絶えることなく今日に伝わっています。



岩国行波の神舞 (出典：岩国市ホームページ)

す お う そ お は し ら ま つ ぎ よ う じ  
②周防祖生の柱松行事

周防祖生の柱松行事は、周東町祖生地区で行われるもので、享保19年（1734）以来、伝承されてきたと考えられています。

柱松行事は、柱の頂上に竹と葉で編んだ鉢を置いて、その上にさした長旗をめがけて松明<sup>たいまつ</sup>を投げ上げて点火し、燃え上がらせます。



周防祖生の柱松行事（出典：岩国市ホームページ）

## 6) 名勝

きんたいきょう  
①錦帯橋

錦帯橋は、美しい景観の中で、古い歴史、珍しい形状と巧みな構造をもつことが特色です。橋の上下流各108mの地点から上流637m、下流418m以内の範囲が国の名勝に指定されています。延宝元年（1673）第3代領主吉川広嘉によって創建されましたが、翌延宝2年（1674）春に流失。その年のうちに直ちに再建され、以来276年の間、美しい姿を誇っていましたが、昭和25年（1950）9月当地方を襲ったキジア台風により惜しくも流失しました。

その後、昭和28年（1953）1月に再建され、現在の橋は、平成13年（2001）度から平成15年（2003）度にかけて行われた工事により架け替えられた橋です。



錦帯橋（出典：岩国市ホームページ）

## 7) 天然記念物

いわ や かん の ん く つ  
①岩屋観音窟

岩屋観音窟は、今から約2億130万年前から約1億4,550万年前に形成された地層にある石灰岩によって出来た洞窟で、奥行13m、幅約2mから5m、高さ約11mの規模をもつ比較的小さなものですが、鍾乳石<sup>しょうにゅうせき</sup>やたけのこ状<sup>せきじゆん</sup>につみあがった石筍が発達しています。

また、洞内には木造の観音像に鍾乳石の水滴が滴下し木仏が石仏と化したと伝わる仏像が安置されています。



岩屋観音窟内の仏像（出典：岩国市ホームページ）

## ② 岩国のシロヘビ

本市周辺の限られた地域にだけ生息するヘビで、目はルビーのように赤く、全身は白く光沢があります。アオダイショウのアルビノ（白化個体）と考えられています。シロヘビの起源は明確ではありませんが、元文3年（1738）に千石原<sup>せんごくぼら</sup>で発見されたことが岩国領の記録に残されています。現代に入り個体数が減少していましたが、保護活動を進めた現在は1,000匹以上に回復しています。



岩国のシロヘビ（出典：岩国市ホームページ）

## 8) 重要文化的景観

### ① 錦川下流域<sup>にしきがわ かりゅういき</sup>における錦帯橋<sup>きんたいきょう</sup>と岩国城下町<sup>いわくにじょう かまち</sup>の文化的景観<sup>ぶん か てきけいかん</sup>

岩国城下町は、山陽道と瀬戸内海に挟まれ、錦川の上中流とも交流しやすい位置に、関ヶ原の戦いののちに吉川広家により開かれた城下町です。

平野が少なく、河川氾濫<sup>はんらん</sup>の多い河川に接するという条件の中で行われたまちづくりの典型であり、川と向き合う都市の営みを伝える文化的景観です。これを象徴するのが、城山、錦川、その兩岸にわたる城下町、その町をつなぐ錦帯橋、橋と共に眺められる岩国山という5つの景観であり、これらのまとまりが重なり合い一体性を成しています。



錦川下流域における錦帯橋と岩国城下町の文化的景観（出典：岩国市ホームページ）

### (3) 主な県指定文化財

#### 1) 有形文化財(建造物)

かわけながやもん

##### ① 香川家長屋門

香川家長屋門は、横山二丁目に所在する岩国領家老香川氏の表門です。17世紀末、元禄年間(1688～1704)に大工大屋某によって建てられたものと伝わります。屋根は入母屋造で本瓦葺、正面に向かって左寄りに出入り口があり、大小の扉をしつらえています。岩国市内の木造建造物として最古級のものの一つです。



香川家長屋門(出典:岩国市ホームページ)

いわくにがっこうこうしや

##### ② 岩国学校校舎(現岩国学校教育資料館)

岩国学校校舎は、明治3年(1870)に現在地の近くに新築されたものです。当初校舎は2階建でしたが、明治5年(1872)に3階を増築しました。当初の部分はほぼ和風様式の瓦葺、しっくい真壁造ですが、増築した3階は鉄板葺の洋風建築です。この和洋を混淆した手法は、明治初期の教育制度の激しい変革と文明開化の気運を象徴するものといえます。現建物は昭和47年(1972)に解体修理したものです。



岩国学校校舎(出典:岩国市ホームページ)

きゅうきつかわけ いわくににじむしよ

##### ③ 旧吉川家岩国事務所

旧吉川家岩国事務所は、昭和6年(1931)、吉川家の岩国事務所として建設されました。昭和45年(1970)頃から平成20年(2008)まで「岩国市青年の家」として使用され、現在は岩国徴古館の付属施設です。設計は堀口捨己(1895～1984)で、外部・内部ともに、ほぼ建設当時の姿をとどめています。



旧吉川家岩国事務所(出典:岩国市ホームページ)

ごらくじやくしどう  
④極楽寺薬師堂

極楽寺薬師堂は、周東町の極楽寺境内にあり、桁行3間、梁間3間、重層屋根、方形造、本瓦葺の建物です。

万治3年(1660)に梅枝薬師堂として岩国横山の白山比咩神社境内にあったものを、元文4年(1739)同じ横山地内の寺谷に移し、さらに明治6年(1873)に現在の極楽寺境内に移築したものです。



極楽寺薬師堂 (出典：岩国市ホームページ)

## 2) 無形民俗文化財

いわくになんじょうおどり  
①岩国南条踊

岩国南条踊は、戦国時代に端を発する踊りです。慶長5年(1600)に吉川氏が岩国に入るとともに、城下に伝えられてもっぱら武家の子弟により踊られました。武家の踊りとして質朴ながら勇壮です。踊りは、入端、座面喜、走踊、由利踊、芋踏、引揚の6つの部分から構成されています。



岩国南条踊 (出典：岩国市ホームページ)

やましろしらは かぐら  
②山代白羽神楽

本市北部の山代地方に伝わる神楽の総称を山代神楽といい、山代白羽神楽はその1つです。美和町二ツ野地区で传承されています。

江戸時代中期には舞われていたと考えられ、江戸時代に相次いだ飢饉や疫病の流行に悩まされた農民が、豊作と疫病の退散を祈願した神事として始めたと考えられます。



山代白羽神楽 (岩国市蔵)

やましろほんだにかぐらまい  
③山代本谷神楽舞

山代本谷神楽舞は、山代神楽の1つです。本郷町本谷地区で传承されています。源流は出雲の流れをくむ安芸十二神祇系神楽に備後神楽が強く影響していると考えられ、その起源は享保年間(1716~1736)に遡るといわれますが、言い伝えによると安政年間(1855~1860)に疫病が流行した際、疫病の退散を願って奉納されたとされます。以来100年以上の間、奉納神楽として舞い続けられています。



山代本谷神楽舞

### 3) 史跡

いわくにはんしゆきつかわけ ぼしよ

#### ① 岩国藩主吉川家墓所

岩国藩主吉川家墓所は、横山地区に所在し、岩国に領主として入った岩国吉川家初代広家から、6代領主<sup>つねなが</sup>経永を除き、12代領主<sup>つねもと</sup>経幹までの一族の墓が51基あります。墓所の形成は広家が没した寛永2年(1625)からですが、墓所の中心を占める寺谷口御塔場<sup>おとうぼ</sup>は、2代領主<sup>ひろまさ</sup>広正が没した翌年寛文7年(1667)、3代領主<sup>ひろよし</sup>広嘉によるものです。



岩国藩主吉川家墓所

なかのかわやまいちりつか

#### ② 中ノ川山一里塚

中ノ川山一里塚は、江戸時代、萩城<sup>からひふだぼ</sup>下唐樋札場を基点とする山代街道沿いに設置された25基の一里塚の1つです。萩から数えて24番目、安芸国境からは2番目のものです。自然石を積み上げた角の丸い四角形をなしており、上部はほぼ平らです。正面右側の石組みが一部崩れていますが、全体として原形をとどめています。



中ノ川山一里塚 (出典：岩国市ホームページ)

### 4) 名勝

じゃくちきょう

#### ① 寂地峡

寂地峡は、山口県の寂地山に源を発する宇佐川の上流にある、18からなる滝をもった<sup>いぬもどし</sup>犬戻峡と、同じく寂地山系に源をもつ<sup>りゅうがだけ</sup>龍ヶ岳峡の総称の峡谷です。この一帯の地層は花崗岩類により構成されており、宇佐川の流れによって大小さまざまな深い淵や滝、断崖絶壁などをつくりだし、風光明媚な景勝を成しています。



寂地峡 (岩国市蔵)

やさきょう  
② 弥栄 峡

弥栄峡は、広島県と山口県の県境になっている小瀬川の上流にある峡谷です。岩石の規則性のある割れ目の美しさ、風化浸蝕による形態が風光明媚な景勝を成しており、亀岩、屏風岩と名づけられた岩や、<sup>おうけつ</sup>甌穴現象などを現地で見ることができます。



弥栄峡（出典：岩国市ホームページ）

## 5) 天然記念物

うさはちまんぐう きよじゅぐん  
① 宇佐八幡宮のスギ巨樹群

宇佐八幡宮のスギ巨樹群は、境内の社叢<sup>しゃそう</sup>（神社内の森）を構成しています。目の高さの幹周り2m以上のスギ20本と、伸び盛りの木が多数あり、中でも通称大杉と呼ばれるスギは、目の高さの幹周り7.5m、高さ58mにも及び、県下有数の巨木です。

正和元年（1312）に八幡宮が現在地に建てられた当時からスギがあったとされ、その後も、社叢は神域として大切に保護され、現在に至ります。



宇佐八幡宮のスギ巨樹群（出典：岩国市ホームページ）

## (4) 主な市指定文化財

### 1) 有形文化財

いきみ はちまんぐうほんでん

#### ① 生見八幡宮本殿

生見八幡宮本殿は、美和町生見に祀られる生見八幡宮の社殿の1つです。

本殿は、文化10年(1813)に大雨による社殿大破のため改築されたもので、伝統的な木造の三間社流造、屋根は檜皮葺です。

※三間社流造：前面の屋根が前に大きく張り出した様式が流造であり、その屋根を支えるために柱の数が4本で柱間が3つになるものが三間社流造となります。



生見八幡宮本殿 (出典：岩国市ホームページ)

う さ はちまんぐうしんでん

#### ② 宇佐八幡宮神殿

宇佐八幡宮神殿は、錦町宇佐に祀られる宇佐八幡宮の社殿の1つです。

神殿は、三間社流造、屋根は銅板葺です。

棟札によると弘化元年(1844)に大工が仕事を始める日に行う儀式である手斧始めを行い、16年後の万延元年(1860)に清祓並びに遷宮の儀式が行われています。



宇佐八幡宮神殿 (出典：岩国市ホームページ)

しょうめいかん ふぞく やおよ もん

#### ③ 昌明館付属屋及び門

昌明館付属屋及び門は、寛政5年(1793)に7代領主吉川経倫の隠居所として建造された昌明館に残された長屋2棟と門です。

現在は昌明館のあった敷地には吉川史料館が整備され、残された長屋や門も史料館の一部に活用されています。



昌明館付属屋及び門 (出典：岩国市ホームページ)

ひろ せ はちまんぐうしんでんおよ よこちょう

#### ④ 広瀬八幡宮神殿及び横町

広瀬八幡宮神殿及び横町は、錦町広瀬に祀られる広瀬八幡宮の社殿です。本殿は、神座が3つ並ぶ三社造、屋根は銅板葺であり、棟札から天保6年(1835)の建立です。拝殿は、入母屋造、屋根は棧瓦葺です。その手前には中央に土間をとる形式の平入の建物があり、これを「横町」と呼びます。横町は、棟札から弘化4年(1847)の建立です。



広瀬八幡宮神殿及び横町 (出典：岩国市ホームページ)

## 2) 無形民俗文化財

うえぬ だかぐら

### ① 上沼田神楽

上沼田神楽は、山代神楽の1つです。錦町須川地区で傳承されています。起源は、享保2年（1717）以前と伝えられますが、さだかではなく、その後、広島県の湯来（現在の広島市佐伯区湯来町）から来た石工職人から新しい神楽を伝えられ、現在に至ります。基本的な舞は出雲系であり、12の演目があります。



上沼田神楽

かまが はらかぐら

### ② 釜ヶ原神楽

釜ヶ原神楽は、山代神楽の1つです。美和町北東部の釜ヶ原と大三郎の二つの集落からなる釜ヶ原地区で傳承されています。

現在、傳承されている神楽の原形は、明治末期から大正にかけて旧本郷村から伝わったとされています。楽師の笛や太鼓のリズムが「八調子」とよばれる速いテンポであることが舞の特徴です。



釜ヶ原神楽

ながの かぐらまい

### ③ 長野神楽舞

長野神楽舞は、周東町の三地区（上・中・東長野、下長野、鳴川・中島）に伝わる神楽であり、7年ごとに三地区の輪番により奉納されます。寛永16年（1639）に創設され、享保年間（1716～1736）に数年続いた大飢饉の苦しみに対し、豊作と災いの消滅を祈願するために、享保5年（1720）より7年ごとに神楽舞を奉納することになったと伝わります。



長野神楽舞（出典：岩国市ホームページ）

むかたおかぐら

### ④ 向峠神楽

向峠神楽は、山代神楽の1つです。錦町向峠地区で傳承されており、起源は安政年間（1854～1859）と伝えられます。天保の大飢饉を受け、水路工事を完成させた記念に、地区の若者に教えて秋祭りに奉納したのが始まりとされます。大正時代には石見神楽を取り入れ現在に至っています。



向峠神楽

やつかぐらまい  
⑤谷津神楽舞

谷津神楽舞は、玖珂町の谷津上地区・谷津下地区に伝わる神楽です。江戸時代後期に岩国行波の神舞から伝わったといわれ、嘉永2年(1849)に、玖珂本郷村(現在の玖珂町)の藤井百次郎が神楽面を谷村の氏神の山王宮へ奉納して神楽舞を行ったといわれています。この神楽面が、現在まで伝えられ、この面をつけて神楽舞を奉納しています。



谷津神楽舞 (山根啓史氏提供)

## (5) 主な国登録有形文化財

いわくにちようこかん  
①岩国徴古館

岩国徴古館は、吉川家が寄附した美術工芸品や歴史資料を展示・保管するため、財団法人吉川報効会により建設され、昭和20年(1945)に竣工しました。建物は煉瓦造2階建、低く抑えた外観、正面の角柱の列柱、内部の裾広がり柱に特徴があります。



岩国徴古館

きゅううのちよけじゅうたくしゅおく  
②旧宇野千代家住宅主屋

旧宇野千代家住宅主屋は、小説家宇野千代の生家です。建築時期は明治初期と言われ、木造2階建、平入、入母屋造、棧瓦葺、真壁造です。出格子、軒下の出し桁、猫足の腕木など岩国の町屋に共通した外観となっています。

内部は土間の玄関に、時計の間、客間、仏間、鏡の間などと名付けられた和室が配置されています。



旧宇野千代家住宅主屋 (出典：岩国市ホームページ)

きゅうきつかわていうまやもん  
③旧吉川邸 厩門

旧吉川邸厩門は、明治25年(1892)、旧岩国領主吉川経健が建設した吉川邸の長屋門です。南寄りに門口を構え、外壁を漆喰とし、要所に横連子窓を設けてます。屋根は寄棟造棧瓦葺です。

伝統的な形式を保ちながら小屋組にトラス組を取り入れており、近代の大邸宅の様子を今に伝えています。



旧吉川邸厩門 (出典：岩国市ホームページ)

きんうんかく  
④ 錦雲閣

錦雲閣は、明治18年（1885）、旧岩国領主吉川家歴代の神霊を祀る吉香神社の絵馬堂として建築されたもので、入母屋造の楼閣風建築です。

階下の外観は外周腰部までを板壁、中間部を吹き放し、上部は漆喰壁仕上げとし、階上は四囲に高欄付きの縁側を巡らせています。



錦雲閣

くにやすけじゅうたく  
⑤ 國安家住宅

國安家住宅は、江戸時代より鬢付け油（「梅が香」、「蘭の雫」）を製造販売していた松金屋又三郎によって建てられたものです。客座敷床の間の座板裏面に嘉永3年（1850）の墨書銘があります。

間口9間の厨子二階、平入、塗屋造の町家建築です。

※塗屋造：建物の外部の柱や窓枠などを大壁造（柱を見せない木造の作り方）として、漆喰の白壁とした建築様式です。



國安家住宅（出典：岩国市ホームページ）

じえーあーる にしいわくにえきえきしや  
⑥ J R 西岩国駅駅舎

JR西岩国駅駅舎は、昭和4年（1929）、岩国駅として開業しました。昭和17年（1942）に麻里布駅を岩国駅と改称した際に、西岩国駅に改称されています。木造平屋建、寄棟造、棧瓦葺、外壁モルタル仕上げで、正面入口上部に設けられた、アーチ窓と柱形（ピラスター）からなる表現派風の大きな切妻と、錦帯橋をイメージさせる連続アーチの入口車寄に特色があります。



JR西岩国駅駅舎（出典：岩国市ホームページ）

すいせいしよいん  
⑦ 水西書院

水西書院は、明治19年（1886）に建設され、吉川家の新邸が完成するまでの間利用していた仮住居です。井上馨や皇室関係者を迎えたこともある由緒ある建物です。明治21年（1888）吉川邸完成後は吉川家の接客所としての役割を担いました。

木造二階建、寄棟、棧瓦葺で茶室を付設します。



水西書院（出典：岩国市ホームページ）

## (6) 主な特産品(農産物・醸造品・郷土料理等)

### 1) 岩国寿司

岩国寿司は、江戸時代に岩国領主吉川公に献上して喜ばれたという言い伝えから「殿様寿司」とも呼ばれる押し寿司です。特産品の岩国れんこんの酢漬けや伝統野菜のチシャ、アナゴの煮付け等たくさんの具材を使い、木製の寿司枠で大きく作り、一人前ずつ四角く切り分けて提供されます。現在でも横山地区や岩国地区で営業する複数の店で食べることも土産として持ち帰ることもできます。



岩国寿司 (出典: 岩国市ホームページ)

### 2) 岩国れんこん

岩国れんこんは、<sup>きょうわ</sup>享和年間(1801~1804)、農家の村本三五郎が、岩国領主吉川公の命を受け、備中種を持ち帰り、それを<sup>もんぜん</sup>門前地区に植えたのが始まりとされます。れんこんの穴が家紋の<sup>くようもん</sup>九曜紋と似ており、吉川公が喜んだという逸話も残ります。沿岸の干拓地に馴染む種として大正時代から<sup>しろばな</sup>「白花種」に変わるも、各農家はその年によくできたれんこんを種れんこん(種バス)とし、翌年植えつけて繋ぎ続ける栽培が続いています。味が淡白でクセがないので、あえ物・寿司のたね・煮物・揚げ物等のさまざまな料理に利用されます。夏には<sup>おづ</sup>尾津地区は一面のハスの葉が広がります。



岩国れんこん (出典: 岩国市ホームページ)



尾津のハス田

### 3) <sup>おおひら</sup>大平

大平は、岩国地域を代表する料理の一つで、平たく大きな蓋つきの塗り物の椀「大平」に入れて食卓に提供することから、「大平」と呼ばれます。鶏肉や里芋、れんこん、長芋、しいたけ、ごぼう、高野豆腐などのさまざまな具材を加えた汁の多い煮物です。冠婚葬祭などの大人数が集まる時に提供されます。



大平 (出典: 岩国市ホームページ)

#### 4) 岸根ぐり<sup>がね</sup>

岸根ぐりは、美和地域を中心に栽培されている栗で、一粒30g以上の和栗最大級の大きさであり、甘味が強くまろやかな味が特徴です。由来については諸説ありますが、平安時代末期、源平の戦いの後、平家の落人の一部の人たちが今の岩国市美和町坂上地区に逃れ、天然の栗の木(台木)に接ぎ木をして育てたのが始まりとされ、その技術を近隣の農民に伝授したことで広がり、伝わったといわれています。



岸根ぐり (出典: 岩国市ホームページ)

#### 5) 高森牛<sup>たかもりぎゅう</sup>

高森牛は、周東地域で生産される牛肉の銘柄です。明治時代より、周東地域では牛の競り市場が開かれるほど食肉産業が盛んでした。

高森牛の生産・出荷管理等は玖西食肉研究会が行っています。その品質を保つため、肥育環境から加工まで、厳しい規則が定められており、これをクリアしたものだけが高森牛を名乗ることができます。

その肉質は甘味とコクがあり、周辺地域はもとより、最近では全国から注目を浴びています。



高森牛 (出典: 岩国市ホームページ)

#### 6) 錦町のこんにやく

錦町のこんにやくは、水はけの良い傾斜地で育てられた蒟蒻芋<sup>こんにやくいも</sup>と地下天然水によって作られる風味豊かな名産品として多くの人に親しまれています。

かつては錦川の舟運で城下町へと卸されていました。



錦町のこんにやく (出典: 岩国市ホームページ)

#### 7) 錦川の鮎

錦川の鮎は、良質な苔を食べて育ち、とても美味しく、古くから特産品として親しまれています。特に、支流の宇佐川で獲れる鮎は全国コンクールでグランプリや準グランプリを獲得するほど高い評価を得ています。

鮎が獲れるのは、鮎漁が解禁される6月~12月です。初夏に川を遡ってくる「若鮎」、9~10月ごろに産卵のため川を下る「落ち鮎」も美味しく味わうことができます。



錦川の鮎 (出典: 岩国市ホームページ)

## 8) 日本酒

本市では、錦川の清流を活かした酒造りが盛んです。錦町には明和元年（1764）創業の県内最古とされる酒蔵があります。下流域には3つの酒蔵が銘酒製造を営み続けています。その中には銘柄に錦帯橋や錦川に由来するものもあります。島田川の支流にも1軒の酒蔵があり、市内外の多くの人に親しまれています。



日本酒（出典：岩国市ホームページ）

## 9) 由宇とまと

由宇とまとは、由宇地域で栽培されているトマトで、堆肥や有機質肥料を用いて環境に優しい方法で作られています。その特徴は酸味が少なくコクのある旨味です。

由宇地域は比較的台風被害が少なく、市内でも温暖な土地柄であり、トマト栽培には適していました。昭和50年（1975）頃からトマト栽培と共販を開始し、「由宇のトマトは美味しい」と評判が広がり、少しずつトマト農家が増え栽培が広がっていきました。



由宇とまと（出典：岩国市ホームページ）

## 10) わさび

本市の錦町では、中国山地を源流とする錦川の清らかな水と、夏でも涼しい気候風土により、良質なわさびが育てられています。

豊かな自然の中で育ったわさびは、ツンとした辛みだけではなく、その奥には風味の甘さが感じられます。本格的に生産が始まったのは明治の頃だといわれています。



わさび（出典：岩国市ホームページ）

## 11) 石人形

石人形は、錦川に棲む、ニンギョウトビケラの幼虫が小石を集めてくっつけ、「巣」として使っていたものを人に見立て、工芸品としたものです。錦川の豊かな自然を活かした産品として、江戸時代から錦帯橋観光の土産物として親しまれています。全国でも珍しいお土産となっています。



石人形（出典：岩国市ホームページ）